

ハラルト・フォン・アイヒェン

——十二世紀後半の一齣こま

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン 著

鈴木満訳・注・解題

〔一〕

一一六五年秋くがつ月の第三日、方伯ルートヴィヒ四世——この名の方伯としては二世——は父君ルートヴィヒ三世①に造営されたヴァルトブルク城②の穹窿きやうりゆう高き騎士の広間に立っていた。御前ごぜんなる天鵝絨ペリロードの褥しとねに跪ひざまつくはハラルト・フォン・アイヒェン③。方伯の廻りにはルートヴィヒの友人や家臣である数多くの伯爵、貴族、騎士輩ほらが佇立ちよりつしている。方伯は剣を高く掲げ、跪ひざまいている男の肩を三度軽く打って、こう言った。

「余、テューリゲン方伯にしてヘッセンの支配者、ルートヴィヒ二世④は、汝なんじ、ハラルト・フォン・アイヒェンを打ち、父と子と聖霊の御名みなにより騎士に叙任しよにんいたすものなり。この三度みたびを除き、向後まうしやういかなる打擲うちうちやくをも許すべからず。汝の生命同様騎士の榮譽を重んずべし。虐げられたる無実の者、寡婦みなし、孤児みなしを神の栄光に懸けて護るべし。聖処女マリアの栄光に掛けて女人にょにんを庇たもい、敬すべし。皇帝に忠誠なるべし。同じく汝の国君および領主に忠実たるべし。

騎士の言葉に掛け、手打ち「確約」して、これに遵う、と余に誓うべし」。

ハラルトは誓い、身を起こした。ルートヴィヒはその額に接吻する。多くの騎士たちが近づき、誠心誠意彼の手を握った。

上の張り出し^パし^ル敷^コには方伯妃^{ウッタ}の女官アーデルグンデイス・フォン・エシルバハ⁶が夫人の腰元たちとともにいて、この儀式を見守っていた。アーデルグンデイスの眼差しは殊更の好意を籠めて成り立ての騎士の若やかな容姿にたゆたった。ハラルトも目を上げてそちらを見遣る。薔薇が自余の花^ハに、月が星星に、金剛石^{ダイヤモンド}がその他の寶石に輝き優るように、その美しさの前にはいずれの上臈方も顔色^{ガシヤク}無しのアーデルグンデイスの容姿に、彼の心は言いようのないほど突き動かされ、胸裡に、あちらも自分を愛しているのかも、という一抹の希望が萌え初めた。しかし今はずっと痴夢に耽っている時ではない。騎士輩が動き出し、そしてハラルトが今一度^{オホ}己が太陽が現れていた天を見上げると、太陽は消え失せていた。さほど離れぬところで二人の騎士がひそひそ話をしながら、嘲るように彼をじろじろ眺めている。すぐさま怒りが込み上げ、すんでのこと騎士たちに、それがしのことを話題としておられるのか、と詰問しようとした時、方伯が彼の片腕を掴み、広間から連れ出した。集っていた騎士輩は二人づつ並んでそのあとに続き、広広とした饗宴の間に入った。ハラルトを小声で皮肉っていた騎士はエツポ・フォン・ハイネックとフーゴ・フォン・ブランデンフェルスで、行列の殿^{シノガ}に加わると、もつと声高に二人だけの内緒話を続けたもの。

「できたての騎士君がふっくら焼きあがったわけだが」とフーゴ・フォン・ブランデンフェルス。「騎士になるのに相應^{ふさわ}しいどんな勲^{いさおし}を挙げたのかというとな、なんだか知らんが、我が畏敬すべき、雄雄しき方伯様^{フーバー}を鞍から落とした牡猪^{エーバー}を斃^{たお}したのだそいな。方伯様はなんとも手練^てれの獵人^{リョウジン}であらせられるのう」。

「我が方伯は」とエツポ・フォン・ハイネックが言葉を差し挟む。「いつまで経っても変わりやせん。おぬし、こ

れまでかようなことで騎士に叙任されたのを見たことがあるか。まっこと、殿があのお気に入りのために今日設けた饗宴は飛び切り上等でなければならぬぞ。ヴァルトブルクまで我らがえつちらおつちらやつて参つた骨折り相当ならばなあ」。

「忘るなよ。舞踏があるのを。して、エシルバハの姫御前も踊り手として加わろうがな」とフリーゴーがにったり応じて、ぶつくさ言う相手に止めを刺す。

「まあさ、まあさ」とこちらは慌てふためき、それを思つて欲びにぞくぞくしたのを押し隠して「そりやただ飲むためだったら、こんなところへ来やせんさ」。「おぬし、あれを見なんだのかな」とフリーゴーはかなり揶揄した口調で言う。「え、何を」とエツポはぎくりと問い返し、饗宴の間の戸口で立ち止まる。

「ハラルト・フォン・アイヒェン騎士殿が、おぬしの讚美渴仰なさるかの君が綺羅を尽くして立つておられた張り出し^バ_ル^コ_ン敷に、いやもう尋常ならざる視線を向けとつたことをよ。して、あちらもじつくり奴をご覧あそばしておつたが」。

「ええくそ、忌^い忌^{まい}しい」とエツポが罵る。「あの餓鬼めの頸根っこをへし折つてくれよう。令嬢が奴をじつくり見ている、と言つたな」。

「その通り」というのが返答。「それにな、なにより良くないのは、そうしちゃいかん、とおぬしが奴にも彼女にも文句が付けられぬことだ。なにせ、おぬしはあの姫君に優先権があるわけではないからな」。

「おぬし、代訴人にでもなつたのかよ、フォン・ブランデンフェルス騎士」とこちらは嫉妬に駆られて激昂。「権利だなんだと何をべちゃくちや。わしの権利はこの鞘の中にあるわ」と騎士の大剣を叩いてどなり、「してこの権利を用いて、何人にも権利の有る無しを簡單明瞭に教えて遣わそうぞ」。

「さようむきにならねな」とフーゴーは水を注す。「おぬし同様わしもあの新米騎士を好いておる。また、これもおぬし同様方伯様を好いておる。それになあ、考えてもご覧じろ、我ら互いによく気心が分つておつて、かように些細なことで仲違いなできまいが。さて、さしあたっては口をつくまねば。食卓へ参ろう。このことについてはまた話を続けることにして」。室内では喇叭の響き、釜型太鼓の連打。嚙喰たる喇叭の吹鳴が長々と続き、葡萄酒を満たした酒盃が打ち合わされて澄んだ音色を立てている。両人が入つて行つた時、「優渥極まりなき我が方伯様、万歳」と騎士輩が叫んだ。にやかな温情を眼差しに湛えてルートヴィヒは席から立ち上がり、「我が友垣よ、我が忠良なる臣下よ、全テューリンゲンの騎士一統よ、万歳」と返し、高脚杯を一滴も余さず飲み乾し、その証に左親指の爪の上に酒盃を逆さまに載せてみせると、釜型太鼓が再びどろどろと轟いて、騎士たちの陽気な歓呼と交錯した。顔には喜びの笑みを浮かべ、心中には怨恨と忿懣を抱きながら、エツポとフーゴーは空けてあつた席に着く。

食事が終わり、提琴と横笛の清らかな白銀の音色が舞踏へと誘うと、饗宴の際騎士たちの世話をしていたフォン・エシルバハ姫に、ハラルトがおずおずと近づき、腕を差し出した。令嬢はぼつと頬を染めて会釈し、彼に従つた。なにしろ、この端麗な青年が申し込むのではないかと、漠然と予感していたのでね。騎士たちは、柏の葉と樅の若枝で美しく飾られた大広間に移つた。そこには、方伯の招きに応じて、たくさんの市民の妻女らが娘とともにアイゼナハから来ていた。方伯の先導で軽快な輪舞が始まり、だれの顔にも嬉しさが、和やかに微笑む天界の子どもが、薔薇の花壇を設えたもの。

「台点が入つたか」とフーゴーが、茫然として声もない友に向かつて得得と告げた。「あれが、これまであえて近づこうとする騎士を、悉く大体のところ鼻持ちならぬ高慢さであしらつた跳ねつ返りの娘かよ。先日もわしに肘鉄を喰わせおつた。あの女、わしと踊るつもりはない、とぬかしてな。こちらは一晩中でも相手したかつたに。最近おぬし

の強情つぱりの牝馬ひんばがおぬしを鞍くらから落とした時、野放図のほうずにおぬしを笑い飛ばしたんじゃないか。それから、あの向こう見ずにおぬしが騎馬での競争を申し入れた時、走路の半ばでおぬしを追い越し、まるまる一分も早く決勝点に着いたのでは。それが今はどうだ。いかにも生娘まきむめらしくはに cand、お淑やかに顔を赤らめたではないか。あの青二才の騎士が舞踏に誘うとな。どういうことか分かるか。——あれの心に根付いたのは恋なのさ。この恋にはおぬしの求愛のごとき小枝こえだなんぞは金輪際接つぎ木できまいて」。

フーゴーは口を閉じたが、エツポは相変わらず鈍重たぬしずに考え込んで佇たなずんだまま。仲間の言ったことなど右から左、ろくすつぽ、あるいは何にも聞いていなかった。返辞もせずフーゴーの腕を荒荒しく掴むと、一緒に舞踏の大広間へ赴く。二人が足を踏み入れた時はもう相手になってくれる女性は一人も残っていないかった。彼らの前を通り掛かったルートヴィヒがからかい口調で「どうやら貴公ら、今日はどこでも少しばかり後おくれを取るようだな、騎士輩」と声を掛ける。

何度も甲斐ない試みをした挙句、それでもやつとアーデルグンデイス姫を踊りの相手に譲り受けることのできたエツポは、ほんの数回彼女とぐるぐる廻りをしただけで、むしろくしゃを抑えきれなくなり、こう訊ねたもの。「あのひよっこ騎士はいつたいどんな甘い科白せりふを囁ささきました、麗しの姫君」。

「ずっと雅みやびなお言葉をね」が答。「あなたのご質問などよりも。フォン・ハイネック騎士様」。

「あんな猪殺ぶころしでもお転婆てんばな鳩ちゃんを捕まえて馴ならせるのですか」と無作法者が更に訊く。「ならば、あれに叶わぬことは何もない」。

「エツポ殿はいつたいつから女性にょしやうを辱はずかしめるのがご趣味になりましたの。私、少なくともこれまでではあなた様を悪く思つてはおりませんでした、失礼なお言葉で考かんえがはつきりいたしました」とアーデルグンデイスは手厳しく

やり返し、「こんなことをご質問なさらずに済むような別の上臈をお探しあそばせ」。そう言つて身を振り放す。「エシルバツハ姫」。びつくり仰天した騎士は引き留めたが、こちらは聴く耳持たばこそ、恥ずかしさと怒りに頬を火照らせて広間から飛び出した。窓のある壁龕に倚つてなにするともなく舞踏を眺めていたハラルトは、こよなく美しいアーデルグンデイスから片時も目を離さなかつたが、この時、エツポがしつこく何か訊ねるのを、彼女が目を伏せるのを、騎士の顔に嘲笑が浮ぶのを、そして彼女が体を挽ぎ離して広間を出るのを目撃。彼は踊り手たちの陽気なさんざめきを抜けてこっそりその後を追い、彼女がとある拱廊で泣きながら佇んでいるのを見つけた。心を痛めて近づき、優しく配慮しながら、何がお辛いのか、と問い質し、だれにてあれ、かような侮辱を加えた者に報復をいたしましょう、と誓つたが、アーデルグンデイスは何を訊かれても強情に口をつぐんだままで、それをいなそうとした。そしてハラルトに、また広間で舞踏のお相手を、と懇願されると、あのぶしつけな騎士の慢心を挫けるかな、と思いつき、涙を乾かし、頬に強いて楽しそうな微笑を浮かべ、何事も無かつたかのように、ハラルトの腕に縋つて毅然とした足取りで広間に入ったもの。そしてエツポを冷やかな眼差しでさつと見やる。こちらは齒軋りしながら、歳を喰つたさる令嬢を踊り手の列の中で大骨折つて引き回し、狂つたように乱暴にぐるぐる旋舞したので、息を切らせたご婦人は立っているのがやつとこさ、後生ですから休ませて、と頼まざるを得ぬ。そしてひどい咳に襲われ、これは舞踏が終わるまでいっかな止まらなかつた。

「これからどちらへいらつしやいますの、フォン・アイヒェン様」とアーデルグンデイスは相手に訊ねた。「もう方伯様のお供はなさらなくてもよろしいのですしょう」。

「我らが優しいご主君は」とハラルトが応じて、「城を一つ建てて遣わす、とおっしゃいました。けれど、お傍に置いてくださるよう切にお願いいたしましたら、従者筆頭に登用いたさう、と仰せになり、ご優渥にもわたしの願いを

お認めくださつたのです。されば、我が敬慕の君よ、日毎そなたにヴァルトブルクの城でお目に掛かり、そなたと語ることが叶えられましようや、また、騎士の礼節に則つてそなたに求愛いたすことを、この信実ある僕にお許しくださいましようや」。アーデルグンデイスは、なんとも快かつたにも関わらず、後の質問は黙殺し、先には答えた。「騎士様、そうした歓びを長くはあなたと分かってませんの。何日か経ちましたら、私、方伯妃のおいであそばすノイエンブルクのお城へ参りますので」。

「して、わたしの間の残りには、ご返辞戴けませんので」とハラルトはそつと手を握つて低声で囁いた。

「もうすぐ方伯様のご一行としていらつしやるあなたに、ノイエンブルクのお城で歓迎の杯を差し上げるのが待ち遠しゅうございますわ」と彼女は答を逸らしたが、はにかんで目を伏せたまま。ハラルトは、妬み深い知りたがり屋の耳に聞かれないよう、壁龕の一つにアーデルグンデイスを誘い入れていたのだが、この時彼女の手を熱烈に自分の唇に押し当て、忙しなくこう言つた。「姫、わたしはそなたをこの身の生命同様愛しております。そなたが上の張り出し棧敷に限り無く美しい栄光に包まれて立つておられた時、不寐ながらわたしはそなたを見上げずにはいられませなんだ。そして内心こう叫んだのです。ただこのお方のみ、と。そなたはわたしが初めて恋に落ちた女性です。わたしはこの気持ちをご以上胸の裡に潜めていることはできません。どうかお答を。そなたをお慕いしてよろしいでしょうか。そなたのお心とお手とを待ち望んでよろしいでしょうか」。

「騎士様、随分と性急な」と身を震わせながら彼女。そして頬の濃い臙脂は西空の真紅の夕焼け雲と色を競う。「今すぐに私の行く末を決めよとおっしゃられても。正直申しまして、私、あなたを厭うてはおりませぬ。でも、いずれもつとしかるべき場所であらうお話できるまで、さしあたってはまずこれにて。「いつ、どこです」とこちらは有頂天で叫び、歓喜のあまり彼女の前に崩折れんばかり。

「ほんの数日後、方伯様は狩を催されます。それまでは私もまだ滞在いたします。その折お話いたしましたでしょうね」。そう言う窓を開き、爽やかな夕風に頬の火照りを冷まし、ハラルトと手を携えて再び舞踏に戻った。

舞踏会は真夜中まで続いたが、これがお開きとなると、方伯は居合わせた全ての騎士をインゼルベルクの森林で行う一大狩猟に招待、親しみを籠めた握手を交わして一同に別れを告げた。ハラルトは臥所ふしどで輾転反側てんでんはんそく、前日の欲びの数数がきらびやかに輪舞しながら心の中をふわふわ過ぎよぎって行く。そして夜のしじまを貫いて舞踏曲の陽気な調べが今なお鳴り響いているような気がした。

翌朝早くエツポとフーゴーは馬にまたがり、己が在所目指して速歩で進んで行った。エツポは不機嫌に押し黙り、フーゴーは仲間よりはのんびり構えていたが、心中は方伯に対する恨みつらみで一杯だった。「ああした主君にはもうこれ以上仕えたくない」と遂にエツポが爆発、「あの殿のこと、じきに既の下働きの小僧風情ふざいを騎士に叙任するだろうて。おべつか使いの洒落者にどうして我らが尻目に掛けられなきゃならんのだ。全体あのアイヒエンてのは何者だ。奴の両親はどこに住んでおる。奴の系図はどんなものなのだ。それからあのエシルバハだが、方伯妃に、——そうさな、方伯妃といやあ、あれに合うなんてのはそうおらんのだろうな、でなけりゃあんな女らしい亭主と結婚するわけではないて——、いや、わしの言いたいのはだな、方伯妃に、あの女、お情けで養われているではないか。あの女の先祖とかその連中の武功について何か聞いたことがあるか。わしはあれの素姓すじょうなぞ知らぬ。だが、牛は牛連れ馬は馬連れ(12)、と申すわ。あの兩人にそいつは認めてやれよう」。

「おぬしが考えるようなことは、わしも、ローベルト・フォン・ブランデンブルクも、ハンス・フォン・キューブルクも考えておるさ。他にも何人かな。皆方伯には腹を据えかねておるのだ」というのがフーゴーの返答。「方伯には英雄しいところが全く無いし、豪胆な伯爵や騎士輩を統御する術すべを心得ておらず、また、その器うぐわでもない。した

が、おぬし、かようなことも 慮おもんばからねばなあ。断固たる主君だともつとずつと我らが 私事わたくしごとに 嘴くちばしを突っ込んで、認可を伺わずにやっておるさまごまなことを容赦せんだらうて」。

「おぬし、大狩猟に加わるか、フォン・ブランデンフェルス騎士」と片方。「あの生意気な令嬢など屁でもない。あれはおのれのご愛顧はいつだって引つ張りだこだ、と思っておる。わしが出掛けて行って、その邪魔をしてやれば、恋しいお方と二人つきりにはなれんわさ」。そう言つてエツポは袂を分かち、疾走して立ち去った。フーゴーはといえば、悠悠閑閑駒を進め、今様の流行唄いまようの最初の一節を口ずさんだ。

山を越えたりやのう、泉も越えて、

墓の下でものう、水底みなぞこにても、

谷の下でものう、湖底うみぞこにても、

奈落なれの径みちなれ、岩山越えも、

恋はどこでもよう、案内者あないじやよう。

狩の角笛が何本も鳴り渡る。城の中庭では馬たちが 嘶いなきいて 夏夏かつかつと蹄を鳴らし、獵人たちの傍らで犬どもが嬉しさに鼻を鳴らして躍り上がる。アーデルグンデイスは早くも雪白の側対歩馬ソッフェルターにひらりとまたがっていた。右手には獵槍じやうを握り、左手で軽く駒の手綱を握り、気高いディアーナが被るような輝く胄(14)の青鷲(15)の羽飾りを靡かせ、まこと女戰士ウィアゴトさながら。この白銀しろがねの胄は豊かな髪の毛を包むことができなかつたので、長い巻き毛が胸と両の肩に垂れて波打っていた。ハラルトの眼差しは陶然とその姿に釘付け。彼女の黒い目が稲妻のように彼の目に閃けば、彼の頬に真紅の灼

熱の火が燃え上がる。二人はお互い以心伝心。

この時、緑の獵服を纏い、簡素な羽飾り付き縁無し帽を被った方伯が愛想良い表情で姿を現した。エツポは顔にせせら嗤いわらを浮かべ、乗馬の頸越しにフーゴーの方に身を乗り出し、にやにやしなからこう囁いた。「あのご大層な御仁を見るよ。知らん者だと、我らが獵犬係の使いっぱしりどもと区別がつきかねようぞ」。この陰險な言葉にこっくりして賛意を表したこちらはこう応じる。「あの方は今日の狩でも大層お目立ちあそばさすだるうて。牡角鹿ヒルシユウやら牝猪ヅウやらがでて来ても、殪たおせないのが今から目に見えるようだ。またしても牡猪エトバに突つ掛かけられるかも知れんが」。嚙か喰くたる角笛の響きと獵人たちの陽気な叫び声がこの会話を中断する。狩の一行が動き出した。先頭を切るのはアーデルグンデイスを従えた方伯、その後すぐにハラルト・フォン・アイヒエンが新しい友人二人、オットカール・フォン・ミュンヒとアルベルト・フォン・ヘルゼルガウとともに進み、これに続くのはフォン・ブランデンフェルス、フォン・ブランデンブルク、フォン・ハイネック、フォン・キューブルク騎士その他の面々。それから獵師、盾持ち、勢子せこたちが引きも切らず。

向かうは、インゼルベルクがテューリンゲン国の山山を圧して突兀とつこつと聳え立っているかしこ。数時間後、八方から山を取り巻いている森へ到着すると、狩が始まった。

アーデルグンデイスはハラルトになにやら二言三言囁き掛けるなり、勇ましく疾駆し去った。こちらは嬉しそうに笑って頷き、目には歡喜の薔薇色の反映が輝く。

高らかなハロー(18)の掛け声とともに獵人たちはここかしこへと散った。方伯はヴァルタースハウゼン近郊(19)のテンネベルク城で夜を過ごす決められていたので、やがて、狩獵よりも飲むのが楽しみな騎士輩はここへ引き揚げた。方伯は従士一人を従えてまだ唐檜フイチの森で狩をしていた。すると堂堂たる角を生やしたよく肥えた牡角鹿ヒルシユウが目の前に姿を現

したので、一際強く乗馬に拍車を掛けると、駒は喘ぎながら逃げる牡角鹿ヒルシユの後を追う。従士は狩獵に夢中の主君に随ついて行こうと務めたが、むなしく姿を見失ってしまった。十五分後方伯の馬が死んでいるのが見つかったが、主あるじの行方は杳やうとして不明。

角笛が帰還の譜を吹き、ハラリー(20)が次第に消え、獵人たちが集まって来、三三五五連れ立って、ルートヴィヒが先着している、と思いつつ、テンネベルク城での歓待を受けようと、そちらへ急いだ。ところが一団また一団と到着したのに、方伯はいずれにも同行していない。秋の宵のこと、霧が森や牧に拡がり、最後に供をしていた従士が、お行方を見失いました、との報らせを齎もたらすと、方伯に忠義な僅かな者たちの間に憂色が漂った。ハラルトとアーデルグンデイスもまだ居合わせなかつたが、方伯の身を氣遣つたため、二人のことは忘れられた。一方フーゴとエツポおよびその一味徒党は失踪した方伯のことなどろくすっぽ構わず、把手付きの大杯をなみなみと満たして悦に入り、仲間内で気の置けぬおしゃべり。互いに酌を取り交わし、かなり声高に方伯の誹謗に興じていた。片や獵人たちは再び四方に散って、霧の夜の中主君を探し廻った。森中で犬どもが吠え、角笛の響きが長長と尾を引いて消え、霧の中を夥たぐしい炬火たいまつの明かりが輝く。獵人たちは集まってはまた別れたが、方伯は発見されずじまい。忠臣たちの心は危惧・憂慮とともに不吉な予感で満たされた。

(二)

もう夜も更けていたがルーラ村(21)の鍛冶屋ネーベリング親方はまだせつせと働いていた。村外れの近隣の家家は闇に包まれており、深い眠りがその住民の上に翼を拡げていたが、火花の飛び散る彼の炉は夜闇の中で明るく輝き、鎚づちの響は夜のしじまを貫いてはつきりと聞こえた。

と、扉が開いて入って来たのは、緑の狐服を纏い、簡素な羽飾り付き縁無し帽を被った男。愛想の良い眼差しを向けて、今晚は、と挨拶。「ところで」と彼は自分をじろじろ眺めている働き者に向かって口を切る。「お宅で一夜の宿を頼めまいか、ご主人。して、その前に夕食をな」。到来の客人を頭から足の先まで陰鬱な目付きで吟味していたこちらは、「もとよりだで」と応じる。「うちに有り合わせの品で良ければ、また、下下の食い物をばかにする口の肥えた御仁でなけりゃの」。返辞も待たずに戸棚に近づき、賄えるだけの黒パン、牛酪、乾酪、それから一塊の燻製塩豚筋肉を取り出した。

「こちらの長腰掛に座って食いなされ」。炭がかつかと灼熱するように、鞆の柄にまた手を伸ばしながら言う。獵人は指図された通りにして、質素な食事を賞味した。しばらくすると鍛冶屋が訊いた。「あなたの素性は。してまたどこから来なされた」。

答えて「わたしは方伯ルートヴィヒの狩人。獣を一匹追い掛けていて迷い、仲間たちにもはぐれた。そなたの火の明るい輝きがこのもてなしの好い家に案内してくれたのだ」。

「あのお情け深い方伯の狩人とな」と鍛冶屋はせせら笑う。「この名を言うたびに口を拭かにならん。実はの」とびっくりしている獵師に向かい、もつと烈しい口調で「あなたのお情け深い殿様のためだったら、わしゃあなたを泊めてなどやりはせん。したが、既には藁も干し草もどつさりあるで、眠るがええだ。あなたは好い人間らしいだ。あなたの殿様のためだったらうちの敷居はまたがせないところだがの」。

こう聞かされて獵師の驚きはいや増さり、目は伏せられて、頬はかつかと火照った。「方伯はそなたに何をしたいのだ」と彼はやっと聞き取れるような声で囁いた。

しかし鍛冶屋はこれに返辞もせず、一片の鉄を炭に突っ込んだ。これがすっかり灼熱すると、火鉢で引っ張り出し、

重い鎧を手に取り、鉄を鉄敷の上に置き、力強い手で続けざまにこれを打ちながら、声高にこう唱えたもの。「堅くなれ、鉄のように、お情け深い方伯様よ。あんたが生きておつてもあんたの哀れな臣民に何の助けになろうぞい。あなたの相談役たちはあなたの目に砂を投げ込み「眠らせ」、可哀そうな連中が苦しむのを見ないようにしとる。奴らはあなたの耳を提琴ヴァイオリンと横笛フルーテの音と狩の騒ぎで一杯にし、可哀そうな連中の訴えが聞こえないようにしとる。奴らは国中を勝手気儘に牛耳ぎやうじつて、民草なんぞは踏み付けじや」。

それからこの鉄をまた炭火に突つ込み、鞆で風を送つた。青い焰が炎炎と燃え上がると、鉄を引つ張り出して、鎧で打つては唱え始めた。

「堅くなれ、鉄のように、お情け深い方伯様よ。この鎧がこの鉄に落ちるように、あんたのご家来衆の非道な行いは続けざまにあんたの臣民の上に落ちる。ブランデンブルクに仕えるしもべ、可哀そうなイエルゲは、いぶせき住まいに賦課された税を調達できなんだ。夜昼通して働いたが、挙句の果ては病氣になつた。どうもできずに藁の上でごろり。四人のちびも父親同様青つちよびれて、病やまいに罹かり、その廻りに裸で転がる。女房は目を泣き腫らしてうろつくばかり。そこへ下役したやくがやつて来て、見つかったものは一切合財いっせいがつぱいお取り上げ。ちっほけな家もやつぱりな。哀れな一家は立ち退かされた。それから二日でイエルゲは気の毒ながらくたばつた」。抑揚の無い、うつろな声で鍛冶屋はこう言つたもの。獵師は相変わらずひっそりと長腰掛に座つていた。惨めな暮らしを思い遣つて涙がその碧い大きな目に溢れたが、口はつぐんだままだった。鍛冶屋は新しい炭をついで、改めて鞆を動かし、別の鉄を取り、それが真っ赤に灼けると鉄敷に載せ、鎧を拍子に唱えごとを続けた。

「堅くなれ、鉄のように、お情け深い方伯様よ。わしの名付け親のレスナーはまっこと真つ当な男でな。我が手でせつせと働いて地道くちしに生計を立てとつた。ある時荷車で石を運んだ。どこへかはわしは知らぬがの。狭い谷道で貴族

の家来が乗った軽い馬車に行き逢うた。こやつ、居丈高にレスナーに要求した。重い荷車を戻して、道を明けろ、とな。レスナーはそうはせなんだ。口喧嘩から拳骨沙汰よ。家来は逃げた。したたかにぶん殴られてな。三日後レスナーが余所へ行った、と噂が立った。したがほんとはブランデンフェルスの城の一番下の地下牢に閉じ込められて体を丸めて座つとる。二度と再びわしにや会えまい」。

「酷い」「堅い」ことよな。休息していた長腰掛からさつと飛び起きて獵師が言った。「あい、いかにも酷い」「堅い」と鍛冶屋。「したが、あなたの殿様があれほど軟くなければ、この国に酷い」「堅い」ことはそれほど起きるまいに」。そうしてまた仕事に戻り、炭火が白熱するまで風を送ると、鎚を振るって鍛え始めた。こつ唱えながら。

「堅くなれ、鉄のように、お情け深い方伯様よ。わしがインゼルベルクの麓の森に薪集めに行つた時のことだ。今日方伯が狩をしたあそこへな。そうやって手押し車に積んでいると、遠くからひいひいわめき叫ぶ声が聞こえた。そのつんざくような調子にわしは胸が張り裂けそうだった。その悲鳴が風のような速さで近づいて、藪の中でざざつと音がしたかと思うと、物凄い勢いで堂堂とした牡角鹿が飛び出して来た。体中白い泡にまみれてな。その枝角に両手を縛られ、鎖で牡角鹿に繋がれた男がそれに乗っておった。大声で悲鳴をわめき散らしておつたのはこの男よ。着ているものはずたずたで、襦袢になつて体に垂れ下がつた。何百とも知れぬ傷から止まらずに流れ出している血で、顔はだれだか分からなかった。片目は樹の枝に突かれてとつくに抉り出されちまつてな、髪の毛は血塗れの頭の廻りにざんばらで、皮膚は無残に剥がれており、鮮血が幾筋も流れ落ちていた。わしは仰天して立ちすくんでおつたが、持つていた鋭い手斧を掴んで、十六本の枝角を生やしたその牡角鹿目掛けて投げた。外した。獣は不幸な人間もろとも撫の茂みへ荒荒しく飛び込んで走り去つた。それからまだ長いこと奴の悲鳴が遙か彼方から聴こえていたわい」。

「止めてくれい、後生だ」と獵師が叫んだ。「わたしの胸はそなたの恐ろしい物語に血を流している」。けれども鍛

冶屋は聴こえなかったかのように、先を続けた。

「近くの村に哀れな農夫がおつてな、自分のちつぽけな穀物畑を荒らした牡角鹿を一頭、貴族フォン・ハイネツクの猟獣なのに、殺したのよ。そこでそうしてその償いをさせられたつちゅうわけ」。

「わたしはこんなことを何も耳にしたことはない」。立腹して地団駄を踏みながら、猟師はつい口走った。両眼は消えて行く炭のように黒黒と燃えている。

「あんたが耳にしたところで」と鍛冶屋は笑った。「それが何の足しになつたらう。可哀そうないエルゲの命を奴の子どものために救うてやれたか。レスナーを助け出せたか。鹿を射た不幸せな男を自由の身にできたか。耳にしたところで、あんたは方伯に口をつぐんでおつたらうよ。お傍にいる他のだれもが黙っておるように。それにのう、方伯の従者の一人が騎士輩にその君侯にして殿様たるお方からの命令を持って行つても、あれらは要請をさせら笑い、方伯を女郎呼ばわりし、自分たちに都合の良いことをするだけさな」。しゃべるのを中断して突然鍛冶屋はこう言った。「休みたくはないかの。一緒に来なされ。うまい寝場所を教えて進ぜる」。

「忝い」と物思いに沈んで佇んでいた猟師が応える。「もう夜が白み始めている。きつと道が分らう。神がそなたの手厚いもてなしにお報いくださるように。息災でな」。

猟師が別れを告げると、鍛冶屋は晩禱を誦えて、床に入った。

ハラルトとアーデルグンデイスが日の出を待ち受けているインゼルベルクの最高峰はほとんど明るくなつて来た。

二人の下方にいくらか離れて騎士の盾持ちが馬たちに草を食ませている。「かような高処、かような刻限での逢引の例などまずこれまでにありますまいね」。令嬢が戯れる。軽装の彼女は冷涼な朝風に全身を震わせた。

「それならわたしはなんとも幸せ」とハラルトは言つて、戦く乙女を自分の天鵝絨の外套に包み入れた。「恋の欲

びと好運に酔ってこの高処から朝日に向かい、勝鬨かつごうを挙げる者はわたしを嚆矢こうしといたすなら。しからば、眼下の谷谷にいまだ暗闇が我が物顔でいるように、わたしの敵どもの妬みと報復欲がこの身を包むかも知れませぬが、わたしはそなたの寛容の輝きに向かつて昂然こうぜんとこの頭こゝろを上げます。してまたそなたの頬も東のあの雲のように赤く染まっておりますね。この紅くれないの色こそわたしにとつてそなたの愛の証。そなたは最後にはそなたのご愛顧という陽光をわたしに投げてくださるのでしょう。太陽がまず山のこの峰を照らすように」。

「あなたはお熱に浮かされていらっしやるのですわ」と赤くなった乙女。「そして甘い口説くぜつをお止めにならなければ、面紗ツエルを下ろしてしまひましてよ。朝の牧が霧の流れの面紗ツエルに隠れるように」。

「やあ、その面紗ツエルが谷間に沈んで行くさまをご覧なさい」と青年が叫んだ。清そよしい微風かぜが東から吹いて来て、平地の霧を追い払い、山が一つまた一つと彼らの足許に頂を現し、周囲はますます明るくなった。

「ハラルト」とアーデルグンデイス。「私があなたを好いていることはお分かりですわね。あなたをご信頼して夜中この山頂まで連れて来て戴いたことがもうその証拠。また、私が一存では身の振り方を決められず、私の第二のお母様とも言うべき方伯姫様が、数限り無いご親切を施してくださいました結果、私に対してある種の権利をお持ちになったこともご存じね。このことについては私、どんなことがあってもあの方と争う気にはなれません。どうか方伯様に、私と結婚したい、とお頼みになって。方伯様はあなたのことを奥方様に執り成してくださいませよう」。

若やかな一日が明け初めた。澄み切った淡青のそこに薔薇色の雲の筋がふわふわと浮び、見霽はらるかす限り天の穹窿が微笑んでいる。昇る旭日の最初の閃光が遙かな地平線を区切っている遠い山並の背後からさっと上がった。ハラルトとアーデルグンデイスは黙って立ち尽くし、壮大な光景に見入っていた。

「わたしのものになってください、素晴らしいひと」。ハラルトは突然こう叫んで、美しい女狩人の足許に跪いた。

「わたしのものに。切にお願いつかまつる、この清らなる空の光明に掛けて。我が胸の裡でそなたのために燃える焰もあれと同様清浄しやうじやうです。切にお願いつかまつる、この清らなる空の青に掛けて。信実まことを尽くしてそなたを愛しましように。渝かることなく」。

昼の女王が更に高く昇り、黄金の球が大地から華麗に身を脱して青玉サファイヤの宮居に入ろうとした時、アーデルグンデイスの胃の青鷲の羽がぐらりと下に揺れ、羞はじらいの笑みを浮かべながら、跪いている騎士に身を屈め、波打つ胸に引き寄せて、「永久とわにあなたのものに」と囁いた。

「永久にそなたのものに」と幸運児は歓呼し、相手をひしと抱き締めた。壮麗な太陽も紺碧の天空ももはや眼中に無し。ハラルトの青空はアーデルグンデイスの目にこそあれ。ハラルトの曙色はアーデルグンデイスの頬にこそあれ。相愛の二人は黙ったまま立ち尽くし、爽やかな朝風を吸い、それに何千もの接吻で風味を添えた。令嬢はもう寒くはなかった。

今や彼らの足許も夜が明けていた。見齋るかす限りの彼方まで目を彷徨さまよわせれば、白銀しろがねの糸のように幾筋もの川が野をくねり、多彩な秋の衣装を纏った潤葉樹林が黒黒とした樅カシネや唐檜フィヒテの森と見事な対照ぶり。かしこにはヴァルトブルクが近隣の諸城から一際高く聳え、窓窓が朝日にきらめいている。そのすぐ下方には堂堂たるマーティルシュタイン⁽²²⁾。かしこにはブランデンブルク、キューブルク、ハイネツクの城郭。また北西に目を転ずれば、かしこにはグライヒェン城、ミュールベルク城、ヴァクセンブルク城⁽²³⁾。遙かなる地平線には碧空にハルツ山地が潜み、反対側には遠いレーンの山並⁽²⁵⁾。そしてそれらの下と近くにはテューリッゲン森⁽²⁶⁾の丘の連なりが広がって、シュネーコプフの真っ白な頂が巔立まがりしている。

「すっかり明るくなりましたわ、ハラルト」とアーデルグンデイスはやつとこのことで甘美な沈黙を破り、「私たち、

お別れをいたさねば。ではくれぐれもお気を付けてね、私の信実まことある騎士様。そして今日のこの一刻ひとときをお忘れあそばしますな」。

「この世での至福の一刻をどうして早くも忘れましょうぞ」とこちらは恋に酔い痴しれて返し、紅の頬に接吻、彼女の天鵞絨ビロードのような両手を堅く握った。けれど、アーデルグンデイスはそそくさと恋人の唇に接吻すると、身を振りほどき、下に待つ駒に優雅に騎乗、獵槍を握り、ハラルトが追いつかぬうちに鎧をしっかと踏み締め、今一度、お気を付けて、と呼び掛け、騎士のように獵槍を下げて告別の挨拶とし、見事な馬格の雪白の駒を疾走させて立ち去った。ハラルトもひらりと馬上の人となり、忠実な盾持ちを従えて目の前の道を取って進んだ。

ものの五分と騎行せぬうち、彼の獵犬どもが吠え始め、間近で角笛が一度鳴り、犬の吠え声、馬蹄の響きがずんずん近づくと。間もなく静かに馬を寄せて来たのは友なるオットカール・フォン・ミュンヒとアルベルト・フォン・ヘルゼルガウ。

「や、これはこれは」と兩人は叫ぶ。「我ら、方伯様と貴殿を探していたのだ。殿がいずれにおらるか、貴殿がご存じだとよいのだが。我ら、昨夜は遅くまで森中隈なく殿のお行方を求めたのだ」。

「方伯様が見つからぬとな」。ハラルトは驚愕おどろして遮かきった。「おお、なんとしたこと、しからばわたしも搜索いたさうぞ」。そう言い放つなり、乗馬の両腹に拍車を入れると、どっと駆け去る。

「待たれよ、我らもともに参ろう」と友人たちは叫んだが、ハラルトにはその声も耳に入らず、姿は早くも木木の彼方に見えなくなった。

「方伯様が」とオットカールがアルベルトに言った。「テューリンゲンの騎士一統の中に我らがハラルトと我らのごとき友垣ばかりお持ちなら、まっこと具合がよろしいのだが」。

「そして」とオットカールが付け加える。「国父の温容に裁判官の厳正を結び付けることがおできなら、ハイネツクやブランデンフェルスのごとき奴輩がかほど傲岸不遜に国土を蹂躪しはすまいに」。

「あの威張り屋の石頭どもはいずれよからぬ最期を迎えよう。思いも掛けず早くに蒔いた種を刈り取る羽目になろう」。アルベルト・フォン・ヘルゼルガウは予言した。「柔和な方伯様ご自身の善意と奴らの陰險さの犠牲になりさせねばな。だれでも信用なさるご気性ゆえ、誠実な友と取り入ろうとする猫被りどもの区別がおつきにならぬのだ」とオットカールが慎重な口ぶりで言った時、谷間から朗らかな狩の調べが清爽な山の大気に響き、たくさん男声から成る楽しい歌声が獵笛ヴァルトホルンの音色に和して、遠くまで反響し、山山の笈がこの歓呼を何回も何回も返してよこした。

「方伯様が見つかったのだ」と二人の騎士は異口同音に叫んだ。「あの楽しい朝の歌声がそう告げている」。そして歌の調べを頼りに森の中へ急ぎ、こちらも角笛を吹いて応答した。間もなく彼らは陽気な獵人の一行が移動しているのを望見した。方伯の右には背の高いアーデルグンデイスが、左にはハラルトが馬を進め、自余の狩人と勢子たちが後に続いている。かなり離れてエツポとフーゴーもなにやら熱心にしゃべりながら扈從していたが、オットカールとアルベルトが愛想よく、お早う、と呼び掛けながら傍らを駆け過ぎると、この騎士たちは陰鬱な目付きとくぐもつた挨拶で応えたので、二人の話題が喜ばしいことではなかったことが分かった。

(三)

光る鋼鉄はがねの鎧を着け、白銀の胃の上に伯爵位を示す黄金の冠を載せ、ヴァルトブルク城なる騎士の間の御座ござに厳然たる面持ちで腰掛けているのは方伯ルートヴィヒである。周りにはテューリンゲン国の騎士一統と方伯の全ての封臣

たち。騎士たちは興味津津で佇立し、自分たちを招集した方伯を見守っていた。目的は何なのか知らされてはいないのである。彼らはこれまで一度もこんな峻厳な主君を見たことがなかった。方伯はいつもは愛想の良い温良柔和な表情をあらかじめ顔に湛えているのだが。

最後の騎士が参着すると、君侯は手真似で侍臣たちに扉をことごとく閉めるよう命じた。それから一段高い御座から立ち上がり、合図した。すると、どうしたことか、との囁きや、騎士輩の声高になっていた揣摩憶測がびたりと止み、さしも広大な騎士の間がしんと静まりかえった。

「高貴なる騎士輩並びに友人方、信実ある被官並びに家臣たち、我が忠良なる臣民よ」と彼は高く力強い声で語り始めた。「余は余の栄光ある父君が築城されたこの館にそなたらを集めた。余はいとも聖なる神の御名において裁きを下すこの広間にそなたらを召喚した。余の臣民は、余の騎士輩と被官らがあえて彼らに働いている暴虐を処罰するよう、囁しく余に訴えている。余は主キリストの十字架に懸け神聖かつ誠実な誓約をいたした。すなわち、余は、不正なる家臣の罪過により無辜に流されたのであれば、臣民のうち最も卑賤なる者の血をも贖わしめる覚悟である。永遠なる神の裁きの座で彼らが余を告訴せぬように」。

騎士たちは驚愕した。方伯がこんな口調で話すのをこれまで耳にしたことが無かったのである。これは我が身を指している、と思った何人かは蒼褪めた。方伯の目は爛爛と輝き、怒りの眼差しは抉るように広間中を滑って行った。下を向いた者も少なくない。方伯は言葉を継いだ。

「下役が病気の男を妻子もろとも身一つで路頭に迷わせ、僅かな身上をさもしく奪い取るのを認めた騎士がいる。どんな罰が相応か。——そなたらは黙しておるな。答えぬのか。余は宣告する。かかる者は破廉恥であり、余の臣下たるに値しない、と。さて、至高の神の御名に懸けてそなたらに問う。余のこの判決は公正か」。

「公正でござる」。不意を撃たれた騎士たちの列に低い眩きが走った。内かかなりの者は震える声で自分自身への宣告を口にしたわけ。

方伯が合図すると、ローベルト・フォン・ブランデンブルク騎士が一人の逞しい衛兵に広間に連行された。並み居る騎士たちは恐慌に襲われ、目を瞠って、あるいは方伯、あるいは参集した貴族らを見遣る。

「ここに立つ騎士こそ、そなたたちが、余の判決は公正なり、とせし者なるぞ」と方伯は再び口を開いた。「ローベルト・フォン・ブランデンブルク、貴公は貴公の手にその安寧が委ねられたる哀れな民草の災厄である。貴公の下役どもは余の臣民が病に伏し、せんかたなく賦役金を払えぬのに、最後の身上を奪い、身一つで路頭に迷わせたのだ」。しかし、憤怒の暗い焰がローベルトの顔に燃え上がり、彼は男らしく、決然とこう言った。「方伯様、それがしは騎士家臣がさようなふるまいに及びましたのなら、奴を懲らしめることをそれがしにお許しください。それがしは騎士の名譽に懸けて奴の所業に責めはござらぬ」。

方伯は立ちすくんで空しく言葉を探し、話を急ぎ過ぎた、と悔やんだ。が、即座に気を鎮め、嚴然たる面持ちで言い渡す。「貴公、下役を縛めてヴァルトブルクの城へ差し上せよ。ここで余がその者の罪を決定いたす。して今一度同様の訴えが余の耳に達すれば、貴公は封土を失うことになり、伝令官が余の領国中に貴公の名を公に布告、死刑執行人が貴公の紋章付き盾を国境において打ち壊すであろう。下がるがよい」。——騎士は退いた。方伯が再び合図すると、入って来たのは、小さな目を怒りに燃やし、恨みをこらえているフーゴー・フォン・ブランデンフェルス騎士で、落ち着かなげにきよるきよると夥しい人人を見廻した。

「フーゴー・フォン・ブランデンフェルス殿」。方伯が改めて言葉を掛ける。「そちの城の牢獄に哀れな農夫が鎖に繋がれておりはせぬか。そちの家来を打擲した、との咎でな」。

フーゴーは鄭重な微笑を顔に浮かべ、ルートヴィヒの前に片膝を突いていわく。

「神の恩寵によりテューリンゲン方伯にしてヘッセンの支配者たる優渥極まりなきご主君様、さような者が拙者の許に囚われておりますことなど存じませぬ」。

「ただちにこの騎士の城に配下を差し向けよ」と方伯は震怒して城代に命じた。「して、隠された地下室を悉く捜索させい。レスナーという名の男を見つけ出したら、フォン・ブランデンフェルス騎士はその者にグルデン金貨十二枚を支払い、即刻余の面前、余の城、余の領国から退去いたすのだ」。そう脅されて騎士は仰天ぶりを隠すに隠せぬ。「あの、もしやしましたら」と切り出す。「拙者の城代がこの身に知らせず、また許しもなくさよういたしたやも知れませぬ——」。

「ほう」と方伯が遮る。「もう嘆願か。そちの意向無しには何もできぬそちの城代の罪はそちが負うもの。前もつて主の認可を得ておらなかつたとしてもな。余はそちを知っておる。余は不穏な、騷擾を企む手合いを悉く知っておる。いずれそやつらを見つけ出し、牢格子の内に閉じ込める手立てをも心得ておる」。そして侍臣への合図でエツポ騎士が広間へ呼ばれると、声を高めてこう続けた。「不逞な狐盗人への恐ろしくもまたおぞましき見せしめとして、我らが父祖は、生きている牡角鹿と一体にするという残酷この上ない刑罰を考案した。これは無辜の獣には恐ろしい苦惱であり、不幸な罪人にとってはおぞましきこと極まりなき死の責め苦である。獣は罪人とともに森中を躡進して留まることがなく、遂には力尽きて両者ながら大地に崩折れるのだ。そこがどこであれ、惨めな男は鉄の枷から身を挽ぎ離すことが叶わず、血を流しながら倒れたままでないければならぬ。それ以前に息を引き取っていないければだが」。

この前置きを聴かされたエツポの顔は水漆喰を塗った壁のように白く血の気が引いた。心臓はどきどきと鼓動、勇

気を奮い起こそうとしたが無駄で、四肢が震えるのを止めることができない。方伯は言葉を継ぐ。

「これが騎士のふるまいであるうか。キリスト教徒に相応しいか。人間と申せようか。畑を守ろうとした哀れな農夫を、一頭の死んだ牡角鹿のために、かくも残酷この上ない刑罰に処するのが。余の話が分かったか、フォン・ハイネック騎士」。詰問された方はだんまりを決め込む。怒りの眩きが参集した騎士たちの列に流れた。エツポの残忍さと過酷さが際限も無いことは大抵の者が知っていた。

「その方が余の封臣なのは」と方伯は改めて怒りを向けた。「その方の権勢をかくもあさましく濫用するためなのか」。「吾輩を告訴したのは何者でござる」とエツポは漸くどもりどもり言った。立腹した表情を取り繕い、傲然と構えてみせたが、うまく行かなかった。

「この貴族たちの集まりを法廷として、その方を告訴しているのは余だ。その方は余の家臣たる名譽に相応しからず、と宣言する」。

「青二才殿の家臣というご大層な名譽かよ」と騎士はぶつぶつと眩き、険悪な顔に嘲りの微笑がさつと浮んだ。

「何と申した」。これに気付いた方伯は激して叫んだ。

「吾輩の告訴人が吾輩の審判者で、方伯として判決をほしいままに執行できる身であれば、吾輩に下される判決があらかじめ察しが付く、かように申したのでござる、我が君様。ご随意に吾輩を裁かれるがよからう」とエツポは傲慢さを取り戻して返答した。「ご家臣であるという途轍もない名譽を吾輩から取り上げ、所領を没収なされい。いつの日にかこの報いを受けられる時が参ろうて」と脅しを付け加える。

「ごこな謀反人めを地下牢へ」と方伯がどなった。兵士たちが集まり、エツポを捕らえ、縛り上げると、こちらはぞつとするような脅迫と呪詛を吐き散らしながら連行されて行った。

「余と余の統治権にあえて背きたる余の臣民の蹂躪者どもをかく処罰せしものなり」と方伯は告げ、この日のところは集会を閉じた。

〔四〕

フーゴの城の土牢に入れられていた農夫は発見され、この騎士に予告されていた刑は執行され、エツポ騎士は、暴れてどうしようもないので掛けられた鉄の枷に痲癩をぶちまけ、方伯はナウムブルク近郊のノイエンプルク城に渡御していた。この城へ来たのは極めて甘美な父性愛のため。というのも、貞節で聡明な奥方ユッタ——皇帝コンラート三世の姪——が子息を生んでくれたからである。友人たちは全てこの地で子どもの洗礼に続く祝宴に参加しなければならなかった。一週間の間絶え間ない歓呼がノイエンプルクに響き渡った。馬上槍試合、馬上槍輪突き、華麗な狩猟、舞踏、そして愉快的酒宴が代わる代わるひっきりなし。

「そなたの父君のようにおなりなされ」とルートヴィヒの城付き礼拝堂司祭ヴィルヘルム神父が、父親の生き写しであるちいちゃなルートヴィヒを腕に抱いて揺すぶりながらいわく。「柔和にして温良、公正にして峻厳にな。哀れな人たちの訴えに決して耳を閉ざしてはなりません。困窮者の涙を乾かしてやれば、感謝と随喜の涙がそなたの君侯の冠の見事な真珠となりましょうぞ」。

祝祭が終わりを告げ、ノイエンプルク城内がまた静かになったある日のこと、ルートヴィヒは、すやすや眠っている乳呑み児を胸に抱いている方伯妃の傍に座り、気が置けないおしゃべりに耽って、別れていた間の出来事やその身に起こったことを懇ろに物語っていた。一方奥方も、旦那様の留守中ノイエンプルクで発生したこまごました事件を話して打ち興じる。

「我がいとしの妻に」と方伯は美しい奥方を抱き締め、思い遣りを籠めて接吻しながら言った。「是非心に掛けて欲しい頼みがあるのだ。なんとしてでも叶えてやりたかったことでのう」。

「わらわにできますことでしたら、我が殿にして背の君様、喜んでお引き受けいたします」と相手は優しい微笑を浮かべて応じる。

「それではまずかような話から始めねばなるまい」と方伯は口を切った。「丁度収穫月の末つ方だったが、法外な大きさの牡猪エーバが我がヴァルトブルク城界隈に姿を現した、との報告があった。そこで狩に行きたい気持ちむらむらと起こつてな、獵師、盾持ち、農夫らを急遽招集、その日の午後にはもう彼らの先頭に立ち、そやつが潜んでいるという森に進んだ。その森を取り巻き、犬どもを放つて臭跡を追わせたが、何も見つからなんだ。突然極めて離れた場所で角笛が幾つも鳴り響き、鞭がぱしりと唸り、犬どもが吠え、その直後絶叫が聞こえたかと思うと、また前より静まり返った。わたしは急いでそっちの方へ使いを走らせたが、この者はすぐあちらから来た男と行き逢った。その男が蒼白な顔にまだまざまざと恐怖の色を浮かべ、息せき切つて報告するには、よく肥えた牡牛ほどに巨大な牡猪エーバが飛び出して、六頭の獵犬を引き裂き、二人の男に致命傷を負わせ、長弓の矢、弩しゆみの箭や、槍の歡迎を受けると、向きを変えて再び藪に駆け込んだ、とのこと。我らはいくらか開けた場所におつたのだが、使者がまだ最後まで語り終えぬうちに、繁みの中がざわめき、鼻息が聞こえたかと思うと、不意にその怪物が狂つたように走り出て、我ら目掛けて突進して来た。

こやつに飛びついた犬どもは右に左に投げ飛ばされ、牡猪エーバが更に近寄ると、農夫らも盾持ちたちも雲と逐電いたした。わたしの馬は震え上がり、後ずさりした。わたしは拍車を当て、荒れ狂う獣に獵槍しじやりを構え、奴の汗の滴口中に突き入れようとした。その時馬が棹立ちになつたので、わたしの槍は逸れてしまい、鋭い牙が馬の下腹を切り

裂いたため、馬はわたしもろともどつと倒れ、わたしの槍は木っ端微塵。そして目を爛爛と輝かせて牡猪が向き直り――」。

「ああ、ああ、お止めになつて」と恐怖を募らせながら夫の言葉に耳を傾けていた方伯妃は叫んで押し留めた。そして席からさつと立ち上がると、野獸の必殺の牙から守ろうとするかのように、両手で旦那様をひしとかき抱いた。

こうした紛れもない信実の愛の吐露にルートヴィヒは穏やかに微笑み、妃の花も盛りの頬を撫でて宥めると、物語を続けた。

「牡猪が向き直り、今度はわたしを突こうとした。落馬してちよつと離れたところに投げ出されていたわたしをな。その時救いの天使が馳せつけてくれたのだ。逃げ去つていなかったたった一人の盾持ち、ハラルト・フォン・アイヒエンが。牡猪の咽喉元深く勢い籠めて槍を突っ込み、猟刀で臍腑を抉り、落馬したせいでどうやら捻挫したらしく、やつこのことでわたしが立ち上がった時、彼はもう止めを刺していた。その折には逃げた従者たちの悲鳴に促されて、他の騎士輩、猟師たち、盾持ちらも駆けつけて来たが、彼らは間に合わなかったわけだ。牡猪は咽喉をごろごろ鳴らし、断末魔の痙攣をしながらなお喘ぎ、巨大な四肢をぐんなりと拡げたりぴくりと縮めたりを繰り返し、再び拡げると、死んでしまった」。

方伯妃は深い溜め息をつき、欲びの目を天に向け、「神は頌むべきかな「ありがたいこと」と低声で呟いた。ルートヴィヒは語り継いだ。「さて、救い主を仔細に眺めると、わたしの前にいたのは青年の美しさの典型でな、樅のようすらりとし、柏のようにながしりとしており、居合わせた者たち全員がこの偉業に対ししきりに歓呼を浴びせると、顔赤らめてその黒い目を伏せたものよ。わたしはかような若者がいたのにこれまで気づかなんていたのを不思議に思い、命を助けてくれた礼を大声で心から告げ、帰途わたしと駒を並べるよう申し付けた。この折わたしの質問

に彼はこう答えた。てまえは天涯孤独の身、両親は零落いたしましたして、非の打ち所の無い名乗り以外は何も残しませんでした。そこで殿にお仕えいたしました。ご城代が殿の御名でてまえを採用、その前で誓ったのでございます。殿に忠実にお仕え申し上げ、憂きにつけ樂しきにつけ辛抱し、殿のおんためとあらば身命を賭する所存と。その代わりに日日の食事、お仕着せが支給され、年末に、落ち度が指摘されなければ、グルデン金貨三枚を頂戴できることになっております。ささやかなご奉公——わたしの命を救ったことをあの男はこう申したものだ——が叶いましてありがたい幸せに存じます、とまあ、かような話をな。感謝の気持ちばかりではない、これはわたしにとって掛け替えのない人物と思え、突然好きになりましたので、力の及ぶ限り報いてやらねばならぬ、という気になった。

わたしはヴァルトブルク城で彼を騎士に叙任し、緑地に牡猪エーバの黒い頭をその紋章に加えさせ、我が許に留まる所存であれば、はらからのように処遇しよう、と約束した。事実わたしはあの青年に兄弟愛を感じているのでなあ」。

「なにゆえその方をお連れあそばしませんでしたの。さすればわらわも大切な背の君様のお命を救うてくださったお礼を申せましたのに」と奥方ユッタは興味津津で訊ねた。

「ヴァルトブルクの城代はそろそろ歳なのだ。わたしはハラルトをかしこの守備隊長として置いて来たのだよ。なにせい、わたしは幾人かの貴族に多少厳しい裁きを下した。これを根に持つ輩やからは少なくあるまい。されば、万一の謀反に備えておかねばならぬ。さ、わたしの話はこれまで」とルートヴィヒが締め括る。

「して、わらわに頼むことがある、とおっしゃいますのは。大切な旦那様」と方伯妃は再度問い掛け、探るような目でひとと相手を見つめた。

「それを申すとなれば、新たな話をいたさねば。前のが長かったゆえ、そなたは定めてほとほと退屈したことであらう」と方伯は焦しらす。

「ささ、お話しになって、前置きなどなさらずにね」と余念無く聴いていた妃は懇願。そして、起おつきました方伯家の未来の跡継ぎをあやした。

「そなたは、狩の好きな養い子、アーデルグンデイス・フォン・エシルバハ姫が何人かの侍女と一緒にわたしの供をしてヴァルトブルクに赴くのを許してくれたね。あの娘は城から狩に出掛けたり、あるいは留まって女らしく家事にいそしんだりしたものだ、わたしの傍らに扈從して、角笛が鳴り渡る中、朗らかに高い叫びを挙げて爽やかな朝の大きに馬を出す時ほど快活にふるまうことはなかった。しばしばあれは銀鈴のように清らかな声で、騎士や獵師が朝の挨拶とする狩人の歌に唱和したものだ。

ところでそなた、エツポ・フォン・ハイネック騎士という名を耳にしたことがおありか」。

「覚えはございませんぬ」と奥方が応じる。

「遺憾ながらわたしが処罰せねばならなかった者の一人でもある」と方伯は低く嘆息し、それから声を高めて続けた。「この男、最初の数日、姫をしきりと悩ました。あれの微色きしやくを身に付けたり、騎士として慇懃いんぎんを尽くしたり、果ては大真面目で求愛に及ぶ始末。が、あれは歯牙にも掛けず、冷ややかで皮肉な態度で接した。わたしの傍らを騎乗する別の騎士がやはり姫の微色を身に付け、愛いとしの君に何度もおおよすと目を向けたものだが、アーデルグンデイス姫もこちらは憎からず思ったようだ。

その騎士と申すのは我がハラルトなのだ。既にわたしが寵遇しているために少なからぬ者たちが彼を嫉視し、憎んでいたが、これでエツポはハラルトを憎悪する理由が二重になったわけ。あの夜、わたしだと知らずに鍛冶屋が摘発してくれたことは、もうそなたに話したね。エツポ騎士はある不幸な農夫を鹿殺しの罪で処罰した残忍な男だ。

彼はヴァルトブルクの牢にいる。その所領をわたしはハラルトに褒美として与えるつもりだ。ハラルトはアーデル

グンデイス姫に純愛を捧げていることをわたしに告白した。姫は、わたしが冗談めかして恋の秘事を穿鑿せんざくすると、笑って否定し、追求を躲かわしたが、あれのきらめく目を見れば応諾の色がまざまざと読み取れた。そこで、いとしい奥や、そなたに頼みなのだが、我が友がエシルバハの姫御前むせと縁えんじを結ぶのを、友とわたしに拒まないで欲しいのだ。

「そのうら若い騎士が、殿のお話通りの方、そしてそうしたお話を伺った者が想像する通りの方でいらして、アーデルグンデイスが本当にその方と縁を結びたがっているのですしたら、神様、なにとぞわらわと同様、この縁組を祝福してくださいまし。あの子は孤児の身ですし、わらわはあの子の母の臨終みぎりの砌、親代わりになる、と誓いましたものね。でも、だからこそ、わらわはまずその騎士にお目に掛かり、アーデルグンデイスに相応しい方かどうか吟味せねばなりません。それにまた、まずあの子と相談をいたさねば」。

「そなたの望みのままにいたそう、可愛い奥よ」と嬉しげに接吻しながら方伯。その時家臣が何やら言いに来たので、妻の抱擁から身を振りほどいた。

さてユッタ夫人は鈴を鳴らした。控えていた侍女が参上して、ご用命は、と問うと、「アーデルグンデイス・フォン・エシルバハ姫をこれへ」と言い付ける。

指図に応じて現れた姫と方伯妃がやっと二言三言語らった時、城内が俄かに騒然とし始めた。家来たちが右往左往するのが聞こえ、これに方伯の声が混じる。折しもアーデルグンデイスが乙女の羞じらいのためこの上も無く麗しい紅に頬を染め、黙ったまま目を伏せ、方伯妃が彼女の両手を握った途端、方伯が狼狽した表情でそそくさと部屋に入ってきて、困だん變へんを乱した。二人はびっくりして振り返る。

「わたしは剣を抜かざるを得ぬ仕儀となった。封臣たちに対してな。いかに気が進まぬか、神はご存じだ」と彼は口を切った。「ハラルトの急使の報らせによれば、ブランデンフェルス、キューブルク、ブランデンブルクの騎士輩

その他がわたしに抗して同盟を結び、郎党どもを使唆いたし、わたしに一戦を挑もうと寄せて参るか、ヴァルトブルクを襲撃してエツポ・フォン・ハイデックを自由の身にするか、さもなければ同時にいずれをもつかまつるか、とのこと。してハラルトが砦に持つ兵は百五十に満たぬ。即刻援軍が駆けつけねば一敗地に塗れる仕儀とあいなるは必^{ひつ}定^{じよう}」。

アーデルグンデイスの頬はさつと蒼褪め、羞恥と恋慕から蔷薇色に紅潮していたのが、愛する男を思つて心戦き、百合の白さに取つて代わつた。一言も発することができず、ただもう大きな目で方伯を凝然と見守るのみ。この様子を見遣つた方伯妃は「アーデルグンデイスをご覧あそばせ。あれは告白以上ですわ」そそくさと夫の耳に囁くなり、乙女が崩折れないよう、急いで近付いた。

その時、一人の従士が入つて来て、既に馬たちが牽き出されており、ルートヴィヒの盟友や恩顧の家臣たちをこの地へ招集するべく、使者の面命が八方へ派遣された旨、言上に及んだ。

「されば息災でな、愛しい貞実な妻よ」とルートヴィヒは言つて、両腕を拡げ、ユッタを抱き締めた。「わたしのために武勲と勝利を祈つてくれい」。奥方ユッタは黙したまま。心痛のあまり言葉など見つからばこそ。啜り泣きながら背の君の抱擁に身を委ねた。ところがアーデルグンデイスは突然英気を回復、しつかりと口を利き始めた。

「殿には本日中にご進発で、方伯様」と彼女は目にまざまざと決意を漲らせて訊ねる。

「これよりただちに。一息ついたならのう」が答。

「私、お供をつかまつります。ここにはおられませぬ。殿の軽いご甲冑と、ご成人あそばす前に帯びておいででした御剣をお貸しくださいまし。お傍去らずで闘いとうございます」。

「ならぬ、姫」とルートヴィヒが返した。「狩でそなたがわたしに遙か先んじて駒を駆り立て、十六本の枝角生やし

た牡角鹿ヒルシユをそなたの槍が殪し、こうした楽しみに付き物の厄介ごとを全て雄雄しくそなたが耐え忍ぶといったことであれば、わたしはおもしろがつてそなたを眺めたことであろう。したが、騎士同士の合戦は優しい乙女にはそぐわぬ。ここ、我が妻の許に留まり、妻とともわたしの長子の世話をしてくれい。さすれば、そなたが軽しく戦の危険に命を曝すよりずっと忝く思うぞ。また、わたしは騎士の名譽と君侯としての言葉に掛けて、そなたの心の君を、我が身同様、力の及ぶ限り守ることを約束する。かのひとのためにこそそなたは、わたしとともに出征しよう、と申すのであろう。「御物の具おんものぐに勲いさむしとご勝利を。ご誓言をお守りくださいましね」。アーデルグンデイスはそう叫び、すっかり度を失つて、部屋から転まろび出て行つた。ルートヴィヒは可愛い子息と貞実な妻にもう一度祝福の接吻をして立ち去つた。

それからものの十五分もすると、殿しんがりを承うけなわる彼の兵たちの背後で城の撥はね橋ががらりと吊り上げられた。

(五)

ルートヴィヒの弟、小ルートヴィヒ(35)は居城トーマスブリュック(36)から打つて出て方伯と合流したし、イエナ近郊(37)ではグライスベルク(38)の領主が小部隊を従えて加わつたので、方伯はまっしぐらに前進した。

夕刻総帥の許に再度の使者が全速力で到着。方伯にハラルトの挨拶を伝え、謀反人どもはヴァルトブルクへの救援を断つためこちらへ移動中と報告した。ルートヴィヒは手勢を停止させ、陣を構え、夜になると周囲に見張りを配置、重い心で自分の天幕に引き取り、そこで独りきりになると、神がお守りくださるよう、また、不忠な家来どもの血をあまり流さずに済むよう、全能のご加護を祈願した。

蠟燭は大分燃え尽きたが、ルートヴィヒは相変わらず手に額を埋めて折り畳み寝台の上に座っていた。慰めとなる

眠りは彼を見捨てたようだった。

外では秋風が葉の散りつくした樹樹の枝の間を轟轟と荒れ狂い、枯葉を溝に吹き寄せていた。近くの森からは時折牡角鹿ヒルシユどものくぐもった唸り声がびゅうびゅうという風に混じって響いて来る。外套にすっぽりくるまった槍兵39が方伯の天幕の前で立哨していたが、十月の風に四肢は凍え、疲れきっているのを目を開けていられなかった。ルートヴィヒの脛まふたも今はまじろみに垂れていたが、このまじろみは恵み深く英気を回復してくれはせず、落ち着かぬ、人を脅かすたぐい。切れ切れの支離滅裂な夢が千変万化しながら脳裡を過ぎって行く。城塞の地底深くの牢獄に囚われの身になっているかと思えば、凄まじい合戦の場で闘う。ところが渾身の力を振り絞って敵に斬り付けても、太刀打ちは何の役にも立たず、努力は無益。折しも夢の中でエッポの剣の一撃をしたたかに受けたので、愕然として目を覚まし、思わず知らず飛び起きると、長い黒紗の布に顔を隠した黒い人影がぎらぎらする短剣を手にして前に立っているではないか。ルートヴィヒはまだ夢うつつのまま両手で覆面の男に掴み掛かった。と、電光石火、白刃が彼の胸に突き込まれる。が、しかし、鎖帷子くさりかたびらに当って跳ね返った。これはルートヴィヒが日頃ひそかに装束の下に着込んでいたもの。刺突が不首尾に終わったので一瞬茫然と立ち竦すくんだこの背信者の意図を察知した方伯は男を投げ倒し、大声で従士たちを呼んだ。この騒動に起こされた見張りの槍兵が天幕に飛び込んで来た。これに数人が続いたので、刺客まきかはなんとか脱出しようと全力を振るったが徒勞に終わった。両足を一緒に括られて転がされたのを、更に後ろ手に縛り上げようとした時、男は右手を急に動かして、滑り落ちていた短剣を掴み、取り押さえようとした者たちを近寄せず、それを深深と己が胸に突き刺した。全陣営が沸騰、悉く死者の廻りに群がり寄ったが、とんと見知らぬ顔で、これまでこのような男に会った覚えのある兵士はいなかった。迅速に絞首架が建てられ、暗殺計画の二時間後、雄鷄が啼いて第三夜警時40を告げた刻限にはもう、その屍骸は天と地の間にぶらさがっていた。

この時から方伯は全土にわたって鉄のルートヴィヒと呼ばれるようになった。ひとえに危険を防ぐため鉄の鎖帷子を着用していたからである。

送り出されていた物見たちが夜の白白明けに、敵勢接近との通報を齎した。そこで方伯は少数数の自軍を戦闘配置に就け、一小旗部隊の騎馬兵を伏兵とし、謀反人どもを待ち受けた。農夫や無頼のともがらといった、訓練されていない烏合の衆は、その襁褓の身なりが豪奢に装いを凝らした指揮者たちの盛装ぶりとなんとも甚だしい対照だったが、掻き集めの傭兵らのお蔭で辛うじて統率されていた。さて、太陽がルートヴィヒの甲冑に最初の光線を投げ、「方伯の盾および軍旗の文様である」四本の赤い中帯に仕切られた青地に躍る銀色の獅子が前脚を上げて彼らに飛び掛らんとするかのごとく思われ、方伯の秩序整然とした軍勢の武具や鎧が旭日に燦然と輝くと、大半は意気阻喪、愚の骨頂の企みをひどく後悔した次第。

今や君侯が攻撃の合図を下した。彼の手の者は「ルートヴィヒと正義」と鬨の声を挙げ、どつと敵に向かった。「さあ、やれ、やれい」とフーゴー・フォン・ブランデンフェルスとブランデンブルク騎士がどなれば、わめきながらその配下も迎え撃つ。

合戦は激しくかつ短かった。一時間と闘わぬ内に、まだ命のあつた農夫らで逃げられる者は逃げ去った。謀反を起こした騎士たちは傭兵とともになおも猛烈に奮戦しており、その数は方伯の軍兵を凌いでいる。その時ヴァイマルの丘から喇叭が鳴り渡り、中央に黒い牡猪の頭を描いた緑の軍旗が空高く翩翩とひるがえり、二百の騎馬武者がハラルト・フォン・アイヒェンを先頭に戦場に雪崩れ込んだ。更にまた森から喇叭と喇叭が吹き立てられ、ルートヴィヒの騎兵隊がどつと躍り出した。叛乱軍は包囲され、刃向かう者は打ち倒された。そこで傭兵どもは武器を投げ捨て、大声で助命を乞う。騎士輩は無理やり馬から引きずり下ろされ、高手小手に縛められた。彼らの罵詈雑言は喜び勇

む軍勢の高い歓呼と勝鬨に掻き消された。ルートヴィヒとハラルトは並んで駒を留めた。戦場を見渡した方伯は、かくも夥しい血がかの騎士どもの邪な企てによってここに流されたことを思い、勝利の歓びも損なわれ、彼らに対する怒りがかつかと燃え上がる。一方ハラルトは自分の甘美な歓びが住まうノイエンブルクの方角に遣る瀬無く目を向けた。するとなんと、彼方で何やらびかびかきらめくではないか。そして間もなく鷹のような青年の視力はアーデルグンデイスの白馬とその輝く白銀の冑、そして、疾走する駒に乗って、飛ぶような速さでこちらへまっしぐらにやって来る彼女自身の姿を認めた。姫の後ろにずっと、ずっと遅れて二人の従者が追尾。嬉しくて堪らぬハラルトはたちまち乗馬に拍車を掛けると、恋人目指して突進する。

「ハラルト」、「アーデルグンデイス」と彼方此方で呼び交わすと、二人ながら同時に喘ぐ馬から飛び降り、互いにひしと抱き合った。

さて、縛り上げられた虜とりの騎士たちが方伯の御前に引き据えられると、ルートヴィヒは雷鳴のような声音で滔滔たうたうと怒りの言葉を浴びせ掛けた。

「下劣な謀反人ども」。こう彼は締め括った。「余が正義と汝らの所業に照らして処断いたすなら、汝らは、かしこに吊られているのが見える汝らに雇われた暗殺者の仲間入りをするところだ。さすれば死刑執行人の手が汝らを車輪の上なる賓客の席に案内した(4)であらうよ。したが、ルートヴィヒは家臣を殺す、と言われよう。余は汝らの所領を悉く没収、城塞を破却することもできよう。が、そうしたところで無益むやくでもあり誉れにもならぬ。さりとて余が汝らを処罰せぬままに据え置けば、汝らは従前同様余を軽んじ、従前同様自儘気儘にふるまうであろう。処罰が汝ら待ち受けているぞ。汝らのうちたれ一人思いも掛けぬ処罰がなあ」。——方伯は引き揚げを命じた。ハラルトとアーデルグンデイスが彼と並んで先頭を切り、これに騎馬兵団が続き、それから嚴重に見張られた虜囚たちの順で、後衛は歩

兵たちが承る。

行列が広大な休閑地(45)に差し掛かると、突然ルートヴィヒが、止まれ、と叫び、何人かの隊長を呼び寄せ、これに内密の指示を与えた。それから馬から飛び降りた。全軍が円陣を作る。野良(46)には犁(47)が一台転がっていた。従兵らがこれに近付き、きちんと立てると、下着姿で後ろ手に縛られた虜たちを傍へ連れて行った。方伯の意図が分明になると、彼らは口から泡を吹いて怒り狂った。されど抵抗しても無駄なこと。ルートヴィヒは彼らのうち最初の四人を犁に繋がせ、片手に犁の柄を、もう片手に長い鞭を持つ。あちら側とこちら側に武装した槍兵たちが徒列。さて、全軍の哄笑の下、急速に前進が始まれば、喇叭手たちが朗らかに吹奏して調子を取る。ふてくされた鞍馬(48)どもはなんとも恥(49)ずかしくて堪らず、叶うことなら、自分たちが掘り返している地面に潜り込んでしまいたかった。「穴があつたら入りたかった」ことだろう。長い溝が一筋できると、方伯は別の四人を犁に繋いだ。こうして耕地全体が彼らによつて耕された。この連中の一人が傷つけられた誇りを抑えきれなくなり、じたばたもがきあがいて、綱を引きちぎろうとするたびに、立腹した主君の鞭を喰(50)わされ、大概はおとなしくなつて、土くれの上でたたらを踏むのだった。これが済むと方伯はこの耕地の周囲に何本も丈高い石柱を標(51)として立てさせ、この土地を罪を犯した者の避難所(52)と定めたので、ここへ逃げ込んだ人間がだれであろうと、これを捕らえたり、危害を加えたりすれば、何人たりとも首を失うこととされた。この地所はナウムブルク(53)近郊に現存し、今日に至るまで「貴族の畑(54)」と呼ばれている。

辱(55)めを受けた騎士たちはノイエンブルク城で改めて忠誠の誓いを立てた。彼らが再びテューリンゲンへ引き揚(56)げてから、主君やその盟友たちおよびその家臣らの命を脅かそうと再び何か企もうとするたび、方伯の恐ろしい威嚇の記憶が彼らに跟(57)いて廻(58)った。彼らは異口同音に「方伯ルートヴィヒ二世万歳、その御家の永からんことを」と叫んで辞去した。真摯(59)に歓呼しなかつた者もおそらく少なくなかつたことだろうが。

夕刻、方伯妃の前にハラルトとアーデルグンデイスが跪いていた。片や騎士の盛装に身を包んで、銀糸の刺繍を施した袖なし上着の上に肩から斜めに腰に掛けて緑の綬を締め、青い絹地の外套を羽織り、片や簡素な花嫁衣裳を纏い、豊かな巻き毛に被るのは銀梅花の花冠。

「ハラルト騎士」と麗しい奥方はいとも典雅な口調で言った。「わらわは背の君の命を救ってくださったお礼をいまだいたしておりませぬ。これが我ら兩人の想い出種となってくれますように」。そして寶石で縁取られた台座にルートヴィヒの肖像が付いている重い黄金の鎖を頸から外し、青年のうなじに懸けた。そうしながら肖像を返すともう一方の側にあるのは、インゼルベルクの最高峰で自分の傍らに立っていた時と同じ狩装束のアーデルグンデイスの姿なのを、この幸せ者は見たのだった。溢れる欲びに駆られて、彼はまず方伯妃の手に、それから愛しい肖像に唇を押し当てた。

「幸せにおなりなさい、そなたにはそれに相応しい」と、奥方は低声で言った。「神の恩寵が常にそなたとともにありますよう」。方伯は窓辺に佇み、父親である嬉しさに心弾ませながらいとけない子息をぎゅっと胸に抱き締めた。落日が最後の光線を高い迫持窓の数から室内に射し込ませ、摩訶不思議な輝きで部屋中を満たしていた。許婚同士は立ち上がった。相思相愛の二人がひしと抱き合い、互いに永遠の信実を誓い、君侯夫妻がうつとり至福の回想に耽りながら微笑んで手を握り交わしていると、城付き礼拝堂司祭の侍者が入って来て、司祭様が主のご祭壇で皆様方を今か今かとお待ちでござります、と告げたのだった。

訳注

(1) ルートヴィヒ三世 Ludwig III. 祖父であるテューリッングンのルートヴィヒ髯伯(髯のルートヴィヒ) Ludwig der Bärtige, Graf von Thüringen (下フランケン)のライネック伯爵家出身で、近縁であるマインツの大神司教を後ろ盾として、一〇四〇年テューリッングン 森 北部に封土を与えられ、フリードリヒスローダ近郊にシャウエンブルク城を建設。一〇五六没。ザリエル家 Salier の一門) がルードヴィンガー家 Ludowinger (存続は一〇四〇—一二四七。往古のテューリッングンの豪族) の始祖なので、それから数えればルートヴィヒ三世(一〇九〇頃—一一四〇)。方伯としてはルートヴィヒ一世(在位一一三〇—一四〇)。神聖ローマ帝国皇帝ロタール三世(在位一一二五—一三三七)によって一一三〇年初代テューリッングン方伯 Landgraf von Thüringen および帝国直属諸侯の位を授けられた。「方伯」とはまず第一に帝国内貴族の私的闘争を禁じる皇帝の国内平和令 Landfrieden を遵守させる者。神聖ローマ帝国内の小国の君主である公爵 Herzog 並みの権力があつたようだが、伯爵ではない諸勢力より上位にあるに過ぎず、テューリッングンの伯爵たち(シユヴァルトツブルク、オルラミュンデ、グライヒェンロトナ、ホーンシユタイン他) は方伯と同等の権利を持っていた、との説もある。しかしムゼーウスの物語「メレクザーラ」ではグライヒェン伯爵は方伯ルートヴィヒ四世に従う身分として描かれている。方伯ルートヴィヒ一世の下で、ルードヴィンガー家は隣国ヘッセンにも領土を拡張した(ヘッセンは一一三七年テューリッングンに帰属)。なお彼はシャウエンブルクのルートヴィヒ跳躍伯(跳びのルートヴィヒ) Ludwig der Springer, Graf von Schauenburg (一〇四二—一一三三)の子息。ヴァルトブルクの城やフライブルク・アン・デア・ウンシユトゥルト近郊のノイエンプルクの城を造営したのはルートヴィヒ跳躍伯である。ルートヴィヒ三世(方伯ルートヴィヒ一世)としたのはベヒシュタインの記憶違い。

(2) ヴァルトブルク城 Schloß Wartburg. テューリッングン 森の北西の端に位し、アイゼナハの町を見下ろす山城。一〇六七—一〇七〇年ルートヴィヒ跳躍伯によって築城された。ルードヴィンガー家の最も有名な城。テューリッングン方伯ルートヴィヒ二世の指導の下、一一五六—一一六二年頃、文化的に極めて価値の高い本丸が建設された。ルートヴィヒ二世の次子で、兄第三代テューリッングン方伯ルートヴィヒ三世(在位一一七二—一九〇)が嗣子無くして死んだあと、後継者であることを主張して、第四代テューリッングン方伯(在位一一九〇—一二二七)となったザクセン宮中伯 Pfalzgraf von Sachsen (在位一一八〇—一二二七) ヘルマン一世の時代、ヴァルトブルク城はドイツ文芸の中心となり、「ヴァルトブルクの歌合戦」Der Sängerkrieg auf Wartburg (テューリッングンのある詩人によって書かれた『ヴァルトブルク合戦』Wartburgkrieg (一一六〇)で知られる)の舞台に擬せられる。「メレクザーラ」冒頭近くに登場する聖女エリーザベト(一一〇七—一一三二)とその夫君第五代テューリッングン方伯ルートヴィヒ四世(一二〇〇—一二二七) 在位一二二七—一二二七) が幼馴染となり、やがて短いながらもおおむね幸福な結婚生活を送ったのもこのヴァルトブルク城である(一二二二—一二二七)。エリーザベトは、夫君が十字軍に出征、イタリアのオトランドで病没すると、夫君の弟ハイ

- リヒ・ラスベ Heinrich Raspe (一二〇四—一四七七) によって子どもたちもろとも城から追われる。尤も、一応第六代テューリンゲン方伯はルートヴィヒ四世とエリーザベトの長子ヘルマン二世 (在位一二二七—一四一七) である。やがて第七代テューリンゲン方伯ハインリヒ・ラスベ (在位一二四一—一四七七) が嗣子を残さず死ぬと、ルートヴィンガー家は断絶する。なお、遙か後代ではあるが、宗教改革者マルティン・ルターが一五二二—一五二三年匿われ、聖書のドイツ語訳に携わったのもこの一。一九九九年世界文化遺産登録。
- (3) ハラルト・フォン・アイヒェン Harald von Eichen 「アイヒ」は「柏」の意。
- (4) テューリンゲン方伯にしてヘッセンの支配者、ルートヴィヒ二世 Ludwig der Zweite, Landgraf von Thüringen und Herr zu Hessen。ルートヴィンガー家の四代目 (一二九頃—一三七二)。ルートヴィヒ跳躍伯の孫。ベヒシュタインは「この名の方伯としては二世」と記しているし、事実そうなので、初出「方伯ルートヴィヒ四世」Landgraf Ludwig der Ate ではなく、こちらに注を付けておく。方伯として在位一二四〇—一七二二年。一一四〇—一四四年母ターデンスベルク女伯ヘードヴィヒの後見下に置かれた。シュヴァーベン公フリードリヒの息女ユードイトと結婚。後に鉄方伯ルートヴィヒ Ludwig der Eiserne と添え名された。伝説によれば、ルーラの鍛冶屋が鉄を鍛えながら、「方伯よ、堅くなれ」と唱えて、傲岸不遜な貴族たちを打ち拉ぐよう励ました。貴族たちの謀反を打ち破って、彼らを屈従させた方伯は報復から身を守るため常に鉄の鎧 (鎖帷子であろう) を纏っていたのでこの添え名がある、という。子息は三人。温良方伯ルートヴィヒ (在位一一七二—一九〇)。ザクセン宮中伯 (在位一一八〇—一二二七) にしてテューリンゲン方伯 (一一九〇—一二二七) ヘルマン一世、ヴィルドゥンゲン伯フリードリヒ (在位一一八六—一二二九)。
- (5) 方伯妃ユッタ Landgräfin Jutta。シュヴァーベンのフリードリヒ独眼公 (二世) Friedrich der Einäugige, Herzog von Schwaben (一〇九〇—一一四七) の息女ユードイト Judith (一一三三頃—一一九一)。彼女はドイツ王 (在位一一五二—一一九〇) ・神聖ローマ帝国皇帝 (在位一一五五—一九〇) フリードリヒ赤髯王・帝 (二世) (一一三三頃—一九〇) の腹違いの妹でもある。
- (6) アーデルグンデイス・フォン・エシルバハ Adelgundis von Eschbach。現在ドイツには「エシエルバハ」Eschalbach という町が三つ存在するが、いずれもテューリンゲンにはないので、これらを穿鑿 (せんさく) しても無益であろう。「ヴァルトブルクの歌合戦」に登場する宮廷叙事詩人ヴォルフラム・フォン・エツシエンバハ (?—一二三〇頃) はフォン・エシルバハと綴られることもある。ベヒシュタインはこれからこの姓を思い付いたのかも知れない。
- (7) アイゼナハ Eisenach。テューリンゲン西部の都市。二〇〇六年末現在の人口四万四千八人弱。この町を見下ろす位置にあるヴァルトブルク城によって知られている。町そのものが始めて古文書で言及されるのは一一八〇年のこと。
- (8) ノイエンブルクのお城 Schloss Neuenburg。ヴァルトブルク城とともにノイエンブルク城は一二四七年廃絶したルートヴィンガー家の最大かつ最重要の城郭に数えられた。ザクセン・アンハルト州南部、ウンシュトゥールト川下流を見下ろす高地の突き出た支脈上に位置する。城の

- 北の下方には現在葡萄栽培を産業とするフライブルク・アン・デア・ウンシュトゥルト河畔のフライブルクがある。この小都市はまたナウムブルク・アン・デア・ザーレ（ザーレ河畔のナウムブルク。後掲注「ナウムブルク」参照）の約七キロ北方に当たる。
- (9) 歓迎の杯 *Willkommenbecher*. 葡萄酒や麦酒を満たした、賓客を歓迎する象徴である大杯。ただ「ヴァイルコンメン」*Willkommen*とも言う。ベヒシュタイン「ゼリンデ」にも出る。
- (10) インゼルベルク *Inselberg*. インゼルスベルク *Inselberg*. テューリンゲン森の北西部にある山。標高九一六メートル。
- (11) 方伯妃といやあ、あれに合うなんてのはそうおらんのだろうな、でなけりやあんな女らしい亭主と結婚するわけはないて *der Landgräfin, zu der auch nicht viel sein mag, sonst hätte sie den weibischen Gemahl nicht genommen*. エッポは、坊主憎けりや袈裟まで憎い、とばかり方伯妃に八つ当たりしているが、「あれに合うなんてのはそうおらんのだろうな」の訳は今一つ自信が無い。どなたかご高教を。
- (12) 牛は牛連れ馬は馬連れ「似た者同士は一緒になりたがる」*Gleich und gleich gesellt sich gern*. 「類は友を呼ぶ」「目の寄るところへは玉も寄る」。
- (13) 側対歩馬 *Zelter*. 英語「アンブラー」*aubler*. 同じ側の両脚を片側づつほぼ同時に上げて進むよう調教された軽快な馬。西欧中世の通常の乗用馬はほとんど側対歩馬だった、と考えられる。静かに進むので聖職者や女性が乗るのに向いていたし、長距離の旅行の場合ほだれにとってもこの方が快適だったからである。とりわけ貴婦人が普通用いた横鞍（片鞍とも。またがるのでなく斜めに座る。疾走には不適。アーデルグンデイスのは当然男鞍であろう）を使用するならこの手の馬でなければならぬ。また王侯や聖職者の親閲用乗馬もこれだった。勿論馬上槍試合や戦闘でもっと大きく重い戦馬が使われた。
- (14) ディアーナ *Diana*. โรมマ神話では豊饒、出産を司った。後、ギリシア神話のアルテミスと同一視され、月の女神とも。ここでベヒシュタインは、槍や弓矢を手に山野を駆け巡って狩猟するのが好んだ、というアルテミスの属性を思い浮かべて、ディアーナとしている。
- (15) 青鷲 *Räuber*. 鷲科の鳥。全長約一メートル。頭頂・頸・胸・腹は白色で、後頭に二本の青黒色の長い飾り羽がある。ユーラシア大陸やアフリカに広く分布。
- (16) 女戰士 *Virago*. ラテン語 *virago* から。「女丈夫」「男勝り」「勇婦」。
- (17) 牡角鹿 *Hirsch*. 大きな枝角を持つ、堂堂たる牡鹿。その代表「エーデルヒルシュ」*Edelhirsch*（牡赤鹿）は体長一・八五—二・一五メートル、一五センチの尾を持ち、肩までの体高一・二—一・五メートル、体重一六〇—二七〇キロに達する。両の角には少なくとも合わせて十本の枝がある。
- (18) ハロー *Halloh*. 猟犬たちをけしかける掛け声。
- (19) ヴァルターズハウゼン *Waltershausen*. テューリンゲン州ゴータ郡で二番目に大きな都市。二〇〇六年末現在の人口一万一千余。北東のテ

ユーリンゲン盆地^{盆地}と南西のテューリンゲン^{ツェット}森^森の間に位する。ザルツンゲンからエアフルト、アイゼナハからザールフェルトへの塩街道の交差点として発展。一七六六年に初めてその名が記されるテンネベルク城が住民の防禦施設であった。となると、この物語当時、テンネベルク城は果たして存在したのかなあ。

(20) ハラリー Halari. 獲物を仕留めた、とゆう合図。

(21) ルーラ村 Dorf Rula. テューリンゲン州西部に現存。ほぼドイツ連邦共和国の中央に位置する町。二〇〇六年末現在の人口六千五百余。大気清澄な保養地である。町の紋章は勿論鉄敷の上で鉄を鍛えている鍛冶屋。

(22) マーティルシュタイン Martstein. 未詳。

(23) グライヒェン城、ミュルベルク城、ヴァクセンブルク城 Schloß Gleichen Mühlberg und Wachsenberg. グライヒェン伯爵家に属するいわゆる三ツグライヒェン。ベヒシュタイン「ゼリンデ」訳注「三ツグライヒェン」参照。

(24) ハルツ Hartz. ドイツ連邦共和国の三州、ニーダーザクセン、ザクセン・アンハルト、テューリンゲンの接点に位する、ドイツ最北の中級山岳地帯（標高二〇〇メートル以下で、山頂・山稜がなだらかな山地）。長さ一一〇キロ、幅三〇—四〇キロ。最高峰ブロッケン（二一四一メートル）は中世後期以来ヨーロッパで最も名高い「魔女集合地」とされた。ゲーテの『ファウスト』でもそう描かれている。

(25) レーン Rhon. ドイツ連邦共和国の三州、バイエルン、ヘッセン、テューリンゲンの州境にまたがる中級山岳地帯。その中心部は生物圏保護区となっている。

(26) テューリンゲン^{ツェット}森^森 Thüringer Wald. テューリンゲン州にある、長さほぼ二五〇キロ、幅は三五キロに達する森林の豊かな中級山岳地帯。北西はヴェラ川から南東はフランケン^{ツェット}森^森まで延びている。北ではエルベ河と南ではヴェーザー河（ヴェラ川）およびライン河（マイン河）の分水嶺^{分水嶺}を形成。最高峰はズール近郊の大ベールベルク（九八二メートル）だが、大インゼルスベルク（九二六メートル）とシュネーコプフ（九七八メートル）も重要。

(27) 銀笛 Waldhorn. 弁の無い渦巻き漏斗状の吹奏楽器。

(28) グルデン金貨 Goldgulden. 西欧では長期に亘り銀貨の単独支配が続いた（イスラム諸国や東ローマ帝国では金貨も流通）が、一二五二年イタリアのフィレンツェで初めて金貨が鑄造された。これがグルデン金貨と後に称される貨幣（従って、この物語の時代には存在しない）。片面には市の紋章である百合の刻印と「フィオレンティア」の文字があったので、「フィオーリーノ」（イタリア）、「フロリーノ」（フランス）、「フローレン」（ドイツ）と呼ばれた。十七世紀半ばにはほとんど無くなり、グルデン銀貨に取って代わられる。なお、グルデン金貨の価値を現代に引き直すことはできないが、類推の基準として以下の記事を挙げておく。画家として夙に大層な名声を馳せていたアルブレヒト・デューラー（二四七—一五二八）が、ドイツ王・神聖ローマ帝国皇帝カール五世（在位一五一九—一五六）にしてイスパニア国王カルロス一世（在位

一五一六―一五六)に請願のことあつてネーデルラントへ旅した折、木炭で描いた名士の肖像画に一点一グルデンほどの謝礼を期待(長靴一足も一グルデン)。油彩でデンマーク国王クリスティアン二世(一四八―一五五九)の肖像画を描いて、三十グルデンを下賜されている。一シウトゥーバーは厩舎の少年や宿舎の子への心付けないしお愛想の金額。また十フフェニヒでロースト・チキン一羽を、若鶏一羽を一ヴァイスフフェニヒ(十二・六フフェニヒ)で買っている。一(ライン)グルデン=二十ヴァイスフフェニヒ=二十四シウトゥーバー=四十ヘラー=二百五十二フフェニヒ。デューラー著/前川誠郎訳『ネーデルラント旅日記』(岩波文庫、岩波書店、二〇〇七)に拠る。なお前川氏は、一九九六年朝日新聞社刊行の同書解説で、ロースト・チキンの値段を二千円と設定し、それから計算して、一グルデンを五万円、と考えておられる。惜越な申しようだが、この半値でも良いのでは。しかし、いずれにせよ生活習慣が隔絶しているので、昔日の通貨を今日の価値に換算することは不可能に近い。

(29) 皇帝コンラート三世 Kaiser Konrad der Dritte シュタウフェン家のシュヴァーベン公フリードリヒ一世(一〇七九―一〇九五)の息子。一〇九三―一五二年。シュヴァーベン公フリードリヒ二世(独眼公)の弟、神聖ローマ帝国皇帝ロタール三世の対立王として名乗りを挙げたが、一三五年一敗地に塗れた。相手の死後ラインの諸侯によってドイツ王(在位一三八一―一三五二)に選ばれ、アーヘンで即位。ローマでの教皇による皇帝戴冠は無かった。もともと対立皇帝はおらず、次の皇帝は甥のフリードリヒで、これがドイツ王(在位一一五二―一九〇)・神聖ローマ帝国皇帝(在位一一五五―一九〇)となるので、コンラート三世はホーエンシュタウフェン家出身の初代皇帝とされる。

(30) 馬上槍試合「Turnier」中世の騎士たちのお気に入りの遊びの一つ。完全武装して戦馬にまたがり、盾で上半身の片側を蔽い、長槍を構え、闘技路の両端から突進して、相手を鞍から突き落としたり方が究極的な勝利。ベヒシュタイン「ゼリンデ」訳注「馬上槍試合」参照。

(31) 馬上槍輪突き Ringelrennen 「リングライテン」Ringreiten 「リングレンネン」Ringrennen とも。馬を駆けさせながら、槍で輪を突く中世騎士のお気に入りの遊戯。

(32) ちいぢなルートヴィヒ den Kleinen Ludwig 第三代テューリンゲン方伯(在位一一七二―一九〇)。ルートヴィヒ温良方伯 Ludwig der Milde と添え名された。嗣子の無いまま死去。

(33) あれの黻色キシキを身に付けたり 愛する貴婦人の好みの配色を冑の飾りなどに用いて、自らの渴仰キョウぶりを示すのは中世の騎士の慣わしの一つ。

(34) 御剣 Flamberg Flamberg とも綴る。「フラムベルク」は普通、刃が波状の両手で操る長大な両刃の剣のこと。十五世紀初頭フランスおよびネーデルラントで登場。三十年戦争時代の傭兵などが白兵戦で用いた。鞘が無く、肩に担いで運んでいる図がある。しかしここでは「御剣」くらいの雅語である。

(35) ルートヴィヒの弟、小ルートヴィヒ Ludwigs Bruder Ludwig der Jüngere 方伯ルートヴィヒ二世の父ルートヴィヒ一世には三人の子息がいた。第二子はグーデンスベルクの、あるいは、ヘッセンにおけるハインリヒ・ラスベ做岸伯 Heinrich Raspe der Raube, Graf von

Gudensberg / Graf in Hessen、第三子がこのトーマスブリュックの領主ルートヴィヒ（在位一六八一―一六八九）である。しかし、上記の在位期間に鑑みても騎士たちの叛乱時にはまだ受封されていなかったのではあるまいか。

(36) トーマスブリュック Thomasbrück 未詳。

(37) イエナ Jena、テューリンゲン東部、イルム・ザール平地にあるザール河畔の都市。二〇〇六年末現在の人口十万二千五百人ほど。エアフルトに次いでテューリンゲン第二の都市。第二次世界大戦以前はドイツにおける光学機器製造（とりわけ名高い企業は「カール・ツァイス」(Carl Zeiss)と精密機械工業の中心地。今日では教育・学術都市。テューリンゲン最大の大学（一五五八年創立）がある。古文書にその名が挙げられたのは一八二二年。十二世紀以降イエナの支配者として証明されているロープデブルク Lobdeburg家が一二三〇年こを都市に昇格させ、その後間もなく市壁で囲まれた。それゆえこの物語の時代として証明されているロープデブルク家の衰退とともにシユヴァルトツプルク伯爵家とヴェッティン家が登場。一三三一年までに後者が支配権を獲得。一四二三年以降ザクセン選帝侯国（後のザクセン公国）に所属。短い間（一六七二―一九〇）ザクセン・イエナ公国の首都。その後アイゼナハを首都とするザクセン・アイゼナハ公国に帰属。この時代にムゼーウスはこの町で生を受けた（一七三五年）。一七四一年ザクセン・ヴァイマル公国に移る。これはやがてザクセン大公国となり、このまま第一次世界大戦まで続く。

(38) グライスベルクの領主 der Herr von Gleiberg。未詳。グライスベルク城の廃墟はいまだにイエナ北方のクニッツブルクにある。十二世紀にはシユタウフェン家の支配下であり、直轄領とされていた。シユタウフェン家はこの城に一一五四年臣下の一人ヴァルター・フォン・ヴァイマルを封じているから、この御仁がこの物語の「グライスベルクの領主」かも知れない。なお、方伯妃ユーデイトはシユタウフェン家出身の神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ一世の腹違いの妹だから、この縁でこの城から援軍が来た可能性は高い。

(39) 槍兵 Lanzenknecht。「ランツェンスクネヒト」。グリムの『ドイツ語辞典』にはこの語はなく、「ランツクネヒト」Lanzknechtのみ。それによれば（容易に類推し得ることだが）、「備兵」Landsknechtの音から新解釈したもので、槍Lanzeを主要武器とする兵のこととある。傭兵の一兵種とも言えよう。しかし十二世紀のドイツに傭兵が存在したかどうか。それに総司令官の護衛にはしかるべき家の子弟がこれに当たったことであろう。

(40) 鎖帷子 Eisenpanzer。直訳すれば「鉄の装甲」。しかし行住坐臥着用できるのは鎖帷子以外にはあるまい、と想ってこう訳した。日本のそれとは異なり、西欧の鎖帷子には厚く柔らかな毛織の裏が付いていた、というが、それでも皮膚に痕が残ったことだろう。解題注「鎖帷子 Panzerrock」参照。

(41) 第三夜警時 古代ローマにあつては夜を三等分ないし四等分した。この場合は三等分での夜警時であろう。ムゼーウス「メレクザーラ」にも、「暁の明星が夜明けを告げる第三夜警時」という表現がある。

(42) 小旗部隊 *ein Fahnlein* 三十年戦争時代の傭兵隊にあつては、兵士四〇〇(三〇〇—六〇〇)との説明もある)から成る部隊を指す。これが一〇—一六個で一連隊(十九—二十世紀の連隊——十九世紀英国では兵員七〇〇—一〇〇〇、明治期日本の場合明治二十三年の「陸軍定員令」によれば兵員一四四〇、士官・下士官を合わせれば一七二一——より遙かに成員が多い。ただし連隊はあくまでも傭兵隊長に統率される独立単位の呼称なので、兵員僅か数十というものとさえ存在したが)を構成する。この連隊を指揮するのが皇帝・王侯から連隊創設の特許状を与えられた百戦錬磨の職業軍人たる傭兵隊長である。なお、小旗部隊の部隊長は老練・剛勇者を選びすぐって傭兵隊長が任命した。

(43) 傭兵 *Soldner* 「給金をもらう者」という意味から出たポヘミアやスイスの傭兵が「ゼルトナー」で、十五—十六世紀のドイツの傭兵は「田舎出の連中」といった「ランツクネヒト」*Landsknecht*なる呼称である。しかし、どうやらベヒシュタインはそのような区別はしていないようだ。

(44) 死刑執行人の手が汝らを車輪の上なる賓客の席に案内した。いわゆる「車裂きの刑」を示唆している。これはもっぱら殺人罪に問われた男性に執行された最も恥ずべき不名誉な刑罰。ゲルマン古代から十八世紀まで適用された。罪人は両腕両脛を拡げた格好で地面に横たえられ、両手両足を短い杭に固縛され、四肢と胴体の下には横木が差し込まれる。従つて全身が完全に地面から浮き上がることになる。死刑執行人は車輪を両手に持ち、これで罪人の四肢と背骨をこごとく突き潰す。突く回数には判決に規定されている。次いで、瀕死の、あるいは死んだ罪人はその車輪の輻に編み込まれる。つまり、四肢が輻の上に一回、下に一回来るようにされる。最後に車輪は柱が絞首架の上に水平に置かれる。刑執行の際まず脛が砕かれ、次いで腕その他が砕かれる場合、死は非常に緩慢に訪れるので、罪人が車輪に編み込まれる時ですらまだ生きていることがしばしばだった。それゆえ車輪の第一撃が頸椎に対して行われるのが慈悲の徴とされた。処刑のたびに新しい車輪が用いられた。これには九本か十本の輻が無ければならなかった。なお「車裂き」という訳語はこれまでの慣例に従つたが、「車折り」ないし「車砕き」とでもした方が適切と思う。

(45) 休閑地 中世ヨーロッパの三圃式農業(ドイツを中心とする)においては、地力低下を防ぐために、冬作物(小麦)栽培地・夏作物(大麦、燕麦)栽培地・休閑地(放牧地)と順次交代して土地を活用した。休閑地には冬期を除き家畜が放牧され、その排泄物が肥料となるようにも配慮された。

(46) 罪を犯した者の避難所 *Freisatz für Verbrecher* 中世ヨーロッパにおいては教会、修道院、都市では市民の家屋ですらも、そうした人々のいわば「聖域」(神聖な空間として認知され、そこに逃げ込んでいる限り、あるいは定められた期間内なら、だれもその者に手出しできない場所)だった。司直がきちんと機能しているとは言えなかった時代、王侯や領主、さては都市の参事会などによる裁判が開かれるまで、身を隠す場所が必要だったのである。でないと、過失で人を殺した場合でも、被害者の縁者たちに復讐されることもあったし、無実の罪であっても、興奮した暴民たちに私刑に処されることがあった。こうした避難所には、国家が仇討ち・復讐を禁止し得るだけの法体制を整え、警察が治安を維持できるようになって行くと、消滅の方向に向かう。

(47) ナウムブルク Naumburg. ザクセンリアンハルト州南部の都市ナウムブルク・アン・デア・ザーレ。ハレ・アン・デア・ザーレ南方約六〇キロ、イェナ北方約三〇キロ。二〇〇六年末現在の人口三万弱。ウンシュトゥルト川のザーレ河合流点近く、ザーレ河畔にある。中世、商業・交易都市として大いに繁栄。一〇二九年司教座とされ、一三三八年築城。壮大な大聖堂など歴史的建造物が少なくない。グリム兄弟編著『ドイツ伝説集』*Deutsche Sagen* (一八一六／一八)五五七番「貴族たちを使って耕作したルートヴィヒ」Ludwig ackert mit seinen Adligen によれば、叛乱軍との戦いはこの近くで行われた。ヘビシュタインはその編著『ドイツ伝説集』*Deutsches Sagenbuch* (一八五三)所収「貴族の畑」Der Edelacker の中で「フライブルクの彼方のヌームブルク」Nunburg über Freiburg と記している(解題参照)。このは現在ドイツ最北の葡萄栽培地ザーレリウンシュトゥルト地区の中心として繁栄している。

(48) 「貴族の畑」Edelacker. 現在もナウムブルク産の銘酒である辛口の白ワイン「フライブルガー・エーデルアッカー」Freiburger Edelacker などに名を留めている。なお、「フライブルク近郊のエーデルアッカー」Edelacker bei Freiburg (=Freiburg) と記している文献もある。ナウムブルクとフライブルク・アン・デア・ウンシュトゥルト(前掲注「ノイエンプルクのお城」参照)は僅僅七キロしか離れていないから、それほど良いのだらう。

(49) 彼らが再びテューリンゲンへ引き揚げ 会戦が行われたナウムブルク近辺はテューリンゲン国境附近ではあるが、ザクセンに属する。

(50) 銀梅花の花冠 銀梅花の枝を編んで拵えた冠。純潔の象徴として花嫁の冠に用いる。

(51) 侍者 Mesner. 現在は Mesner と綴る。「ミサの助手」の意。また聖物保管係(聖具係、寺男)とも。教会内の鍵を預かり、雑用に当たる。

解題

「ハラルト・フォン・アイヒェン —— 十二世紀後半の「一齣」の原題は Harald von Eichen. Eine Skizze aus der 2. Hälfte des 12. Jahrhunderts. である。初版では 12. Jahrhunderts を誤って 10. Jahrhunderts (十世紀) とつづる。

これも既にご紹介した「ゼリンデ」と同様テューリンゲンの伝承を素材としている。

テューリンゲン方伯ルートヴィヒ二世、添え名として鉄のルートヴィヒ Ludwig der Eiserne に纏わる伝説は、グリム兄弟編著『ドイツ伝説集』*Deutsche Sagen* (一八一六／一八)に五話収められている。五五六番「堅く鍛えられた

方伯] Der hartgeschmiedete Landgraf、五五七番「貴族たちを使って耕作したルートヴィヒ」 Ludwig ackert mit seinen Adligen、五五八番「城壁を築いたルートヴィヒ」 Ludwig baut eine Mauer、五五九番「遺骸を運ばせたルートヴィヒ」 Ludwigs Leichnam wird getragen、五六〇番「ルートヴィヒの魂はどうなったか」 Wie es um Ludwigs Seele geschaffen war である。このうち、五五六番と五五七番がベヒシュタインのこの物語の素材と合致しよう。桜沢正勝／鍛冶哲郎訳『ドイツ伝説集』（人文書院、一九九〇）に、「堅く鍛えられた方伯」、「ルートヴィヒ貴族を犁に繋ぐ」として訳出されているので、ここでは改めて内容を紹介しない。

次に訳出するのはベヒシュタイン編著『ドイツ伝説集』(一八五三)所収「貴族の畑」^{エーデルアッカー}全文である。

「貴族の畑」^{エーデルアッカー}

さて、かの英雄しき方伯は民草の側に立ち、その相談役や役人たちの押し付ける賦課を軽減した。この連中についてかの鍛冶屋がこう語って聞かせたのである。彼らは狡賢い狩人で赤狐——これすなわち金貨のこと——^②を財布の中に追い込んでいる、と。そこで配下の貴族たちは大いに彼を恨んだ。主君の行為は前代未聞の新機軸だ、と思われたので。そこで反対同盟を結び、もうかようなことには我慢できない、と談合した。彼ら、従おうとしない封臣たちが自儘気儘に我意を通そうとしている、との密報を受けた方伯は鉄の鎖帷子^③を着込み、軍勢を率いフライブルクの彼方のヌームブルクに進発、叛乱を起こそうと徒党を組んでいた者どもを悉皆捕らえ、城の上にある平地へ^④連行し、そこで彼らに一場の演説を行った。その中で方伯は胸の裡にあることを全て彼らに述べた。いわく。汝らは忠誠の誓いを破った謀反人であり、本来なら汝らの首は足許に落ちていたのだ。されど余は、己が家臣たちを殺した、と誇られ^⑤たくない。汝らに償金を賦課したくもない。また、汝らが行ったように、臣下の土地を取り上げたくもない。しかし

ながら処罰せずには釈放はせぬ。さようにいたせば、今後余の怒りを汝らがせせら嗤う所以となろう。そこで余は後代への戒めとして範例を示すつもりだ、と。そして端綱と頭絡を準備させ、貴族たちを四人一組にして一台の犁に繋いだ。これ进行操作するのは従士たちで、方伯は農夫のように鞭を持って後ろから歩きながら貴族たちを駆り立て、長い溝を鋤き返した。そして溝が一筋できると、向きを変え、また別の貴族たちを犁に繋がせ、こうして馬を使ったように畑全体を耕した。それから耕地の周囲に大きな石柱の標を置き、永久の記念とし、これを一種の避難所と定めた。その後方伯はこの地所を「貴族の畑」と名付けた。これは今日なおそう呼ばれており、古いヌームブルクの町の近郊、背後の開けた丘の上にある。さて、かようにしたたかに辱めを受けた封臣たちは改めて臣従の誓いを立てねばならなかった。さもなければ主君の怒りが嵐のごとく襲い掛かるに違いなかったのである。

さて、生来温和で気弱だったルートヴィヒ二世は、ルーラの鍛冶屋に教えられて、配下の貴族たちが人民に対し横暴なふるまいをしている、と聴き、彼らを厳しく処断、更に謀反が起こると騎士たちを膺懲、虜囚らをしかるべく処分したが、血を見ずに済ませた。一方自分の命を救ってくれた純真誠実な青年ハラルトを大いに引き立てる。ベヒシュタインは方伯をこのような人となりに描いたわけだが、ベヒシュタインが育った領国ザクセン＝マイニンゲンの領邦君主ベルンハルト・エーリヒ・フロイント公がなんとなく想起される。公は、一八二八年に出版されたベヒシュタインの『十四行詩の環』*Sonnettenkränze*を読んでこの若き抒情詩人に着目した。公の後援で、ベヒシュタインは一八二九年と一八三〇年、ライプツィヒ大学とミュンヒェン大学で哲学、史学、文学を学んだ。このことなくしては、ベヒシュタインのその後の人生、その大いなる功業は考えられない。ザクセン＝マイニンゲン公ベルンハルト二世（一八〇〇―一八二一。一八六六退位）は歴史的には毀誉褒貶相半ばする人物である。端麗な容貌で、あらゆる階層の人

間と親しみ、それゆえ臣下には愛された。しかし、彼の政治的決定はしばしば軽率かつ失敗だった。とは申せ、弱冠のベヒシュタインの詩才を愛し、その後援者となったのは卓見だったことは間違いない。ベヒシュタインは公の期待に十二分に応えたわけである。物語の執筆は一八二三年以前なわけだから、この時点では彼は公の恩顧はまだ蒙っていない。が、昔むかしのその昔民草を大切にした、と言われる方伯を描写する場合、元来民衆に人気のあった公が、若きベヒシュタインの筆遣いに影響を及ぼした可能性は大いにある。ベルンハルト二世とルートヴィヒ二世の面影が重なり合っているように思われること、そして後年、ベヒシュタインがハラルト同様君侯の引き立てに与ったこと、この二つは案外偶然の一致ではないかも。

なお、原文も展開に依拠して五つに区分（一行空け）されているが、節の数字は訳者が附した。

解題注

- (1) 『メイツ伝説集』 *Deutsches Sagenbuch*. Leipzig 1883. 「貴族の畑」^{上五三番} Der Edelacker は四五三番。なお、四五二番「ルーラの鍛冶屋」Der Schmied in Ruhla も載せられている。『テューリンゲン伝説集』(一八五八)にもある。八七番「鉄方伯」Der eiserne Landgraf in Thüringen *Sagenbuch*. Wien 1858. がこれ。
- (2) これすなわち金貨のこと。十二世紀の西欧では金貨は一般に流通していなかった。本文注「グルデン金貨」参照。
- (3) 鎖帷子 Panzerrock. ベヒシュタインはこのように明記している。本文注「鎖帷子 Eisenpanzer」参照。「鎖鎧」と訳しても良からう。膝から上までの長上着のような形で、胴を帯で締める。互いに嵌め込みにした鉄の環から成り、丸い網目細工の外観を呈する。
- (4) フライブルクの彼方のヌームブルク Numburg über Freiburg. フライブルクはウンシュトゥルト河畔にある。ウンシュトゥルト川はやがてザールレ河に合流する。中世商業・交易都市として大いに栄えたナウムブルク(＝ヌームブルク)はこの合流点の近くに位置する。前置詞 über を「彼方」と訳したが自信が無い。どなたかご高教を。
- (5) 城の上にある平地。ベヒシュタインの記す「ヌームブルク」、すなわちナウムブルクはザール河畔にある。換言すれば肥沃なザール河谷の底部に位置する。南向きの斜面は多く葡萄畑のほす。上の平地は河谷に較べれば、地味のあまり良くなく、冬は寒風に曝される土地であろう。

(6) 頭絡かぶり 引き具ひきぐの首輪。
(7) 生来温和で気弱だった 十一歳くらいの時父方伯が逝去、方伯位を継いだものの、その後四年間母後の後見下に置かれたことと関係があるか。